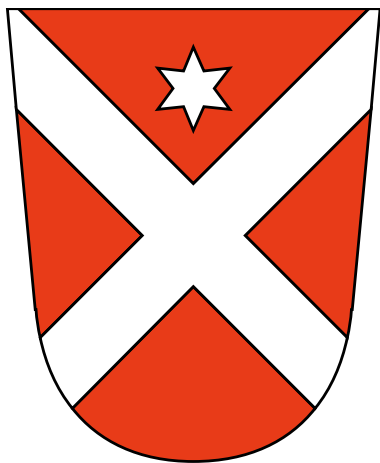

**令和6年度
国際交流視察団報告書**



令和6年12月 奈井江町

目 次

視察団派遣日程 1

視察団報告書 2～49

①奈井江町長（視察団団長） 三 本 英 司

奈井江町議会議長 森 岡 新 二

教育委員会教育支援主幹 井 上 圭 世

企画財政課財政主幹 三 原 英 司 2

②一般参加 山 田 このみ 24

③奈井江商業高校 3年生 豊 嶋 大 樹 33

④奈井江中学校 3年生 佐 藤 柑 奈 38

⑤奈井江中学校 3年生 長 屋 ま る 46



この事業はサマージャンボ宝くじの収益金を活用して実施しました。

ハウスヤルビ町国際交流視察団日程表

令和6年9月26日（木）～10月4日（金）

日 程	内 容
9/26（木）	12:45 出発式（役場） 16:00 新千歳空港 発 17:40 羽田空港 着
9/27（金）	08:25 羽田空港 発 15:40 ヘルシンキ空港 着 ※時差 6 時間 18:00 宿泊場所（リヒマキ市シアターホテル） 着 18:30 ホテルにて歓迎ディナー
9/28（土）	10:00 モンミラ村 ピンテージショップ 訪問 ※学生はホームステイ 11:30 ガラス博物館 訪問 16:00 ハウスヤルビ町 さくら記念植樹式典 17:00 友好都市交流30周年記念パーティ
9/29（日）	10:00 ヒュヴィンカー市 住宅フェア 訪問 ※学生はホームステイ 11:00 ヒュヴィンカー市 クネティラ・ファーム 訪問 15:00 交流（ゲーム、サウナ体験） ※学生と合流 18:00 歓迎会
9/30（月）	ハウスヤルビ町内 視察 ※学生はホームステイ 09:00 役場 訪問 15:00 高等学校 訪問 16:00 図書館 訪問 18:00 町庁舎にて町議会議員と懇談
10/1（火）	09:30 リッティラ市 小学校、幼稚園 訪問 ※学生はホームステイ 12:00 エスコ・スクール 訪問 12:30 ハウスヤルビ町 スポーツ施設 訪問 14:00 アンナ・カーリナ・ヤーコラ元議長 私邸 訪問
10/2（水）	09:00 ハウスヤルビ町 ベンダーズ社 訪問 ※学生はホームステイ 12:30 トランス・ファーム 訪問 17:00 ニ克蘭ディア 送別パーティ
10/3（木）	11:00 ヘルシンキ市 在フィンランド日本大使館 訪問 ※学生と合流 17:40 ヘルシンキ空港 発
10/4（金）	13:55 羽田空港 着 ※時差 6 時間 15:30 羽田空港 発 17:00 新千歳空港 着 19:30 奈井江町 着

【視察団員氏名】

団長	三本 英司（町長）
団員	森岡 新二（町議会議長）
〃	井上 圭世（町教育委員会教育支援主幹）
〃	三原 英司（町企画財政課財政主幹）
〃	山田このみ（一般参加）
〃	豊嶋 大樹（高校3年生）
〃	佐藤 柑奈（中学3年生）
〃	長屋 まる（中学3年生）



国際交流 友好都市提携 30 年の地を訪問して



奈井江町長（視察団団長） 三本 英司

奈井江町議会議長 森岡 新二

教育委員会教育支援主幹 井上 圭世

企画財政課財政主幹 三原 英司

【 30 年の歴史に想いを馳せて 】

「福祉のまちづくり」を实践する先進都市との交流を目的とし、始まりを迎えた当町の国際交流事業。1994 年 8 月に当町の開町 50 年記念式典へ、フィンランド・ハウスヤルビ町のアンナ・カーリナ・ヤーコラ議長（当時）を招待。記念講演をいただいた翌年、1995 年 4 月にハウスヤルビ町において友好都市提携の調印を行ってから、節目の 30 年を迎えることになりました。

時代の移ろいとともにテーマや手法を変えつつも、これまでにハウスヤルビ町への派遣（研修を含む）延べ 122 人、ハウスヤルビ町からの受け入れ 延べ 76 人という規模の交流を続け、関係者はもちろん、両町の多くの町民がお互いを尊重し信頼関係を構築してきました。

今回の国際交流事業については、友好都市提携 30 年という記念すべき年にハウスヤルビ町において主催される、記念植樹を含む関連行事への参加を主たる目的とした訪問であり、30 年もの長きにわたる交流の歴史に想いを馳せるものとなりました。



【 長きフライトの果て 】

今回の訪問は、ロシア・ウクライナ情勢の影響下でありロシア領上空を回避するフライトとなることから、東京・羽田空港からフィンランド・ヘルシンキ空港までの所要時間が通常より大幅に長い 13 時間という長旅となりました。



私たち 4 名を含み、一般参加の町民代表 1 名、学生 3 名の総勢 8 名がこの長旅を経て降り立ったのは、時差で 6 時間ほど時計の針が巻き戻った 9 月 27 日午後の肌寒い北欧の大地。

出迎えいただいたのは、昨年、2 度目の奈井江町訪問を果たし、すっかり馴染みのある顔となったハウスヤルビ町職員のヨーナス・リーヒマキ氏と、町議会議員のカリ・サルミネン氏。再会のよろこびを伝え合ったのち、滞在先であり、本日の歓迎レセプション開催場所となるハウスヤルビ町隣接のリヒマキ市シアターホテルへ向かいました。

長旅の疲れも癒えぬまま赴くこととなった歓迎レセプションでは、進行役のカティ・スメッツ副議長から、「ようこそハウスヤルビ町へ。去年は大変お世話になりました。これまで学びがたくさんある 30 年間の交流が続いてきました。みなさんをはじめ、特に若者（学生）を迎えることができ、うれしく思います。おもてなしのお返しをしたいと思いますし、暖かくお迎えします。」と歓迎の言葉をいただき、また、学生たちがホームステイでお世話になるホストファミリーの紹介が行われました。

ホストファミリーを含め、暖かなフィンランド料理を囲い、しばしの歓談が行われました。



【 両町の絆 】

翌 28 日、近隣のガラス博物館などで歴史ある北欧の伝統工芸の技術に触れたのち、午後からは、本訪問の主たる目的である友好都市交流 30 年記念行事へ参加することとなります。

まずは、ハウスヤルビ町内オイッティ地区の公園において、交流 30 年を記念して当町より寄贈したエゾヤマザクラ苗木の植樹が行われました。

この公園では、これまでも桜の植樹をしてきており、順々に桜の花が咲き始めているとのことでした。

ペッカ・マーッタネン町長、キュオスティ・アロヴォッリ町議会理事長らが臨席するなか、あいにくの雨模様でありましたが、未来の桜花爛漫を望む願いを込めたすばらしい植樹となり、将来的にも両町の交流が続いていくことが約束されるものとなりました。



続いて、夕刻にはアンナ・カーリナ・ヤーコラ元議長をはじめとする国際交流ゆかりの総勢 37 名が臨席するなか、友好都市交流 30 年記念式典が開催されました。

式典では、はじめに残念ながら急用により欠席であった、リスト・ティーパナ議長からのメッセージが、代行としてアロヴォッリ町議会理事長から次のとおり披露されました。

「30 年前、健康と福祉、特にハウスヤルビ町の福祉施設レヒティマヤを参考とする老人施設の関係で交流が始まりました。友好都市の調印が行われた 1995 年 4 月 1 日からお互いの町民の交流も始まり、教育に関連して学生の交流も行われてきました。毎年、30 年もの間、途中で世界的な新型コロナウイルス感染症流行の影響で往来できない時期はありましたが、交流が続いてきました。



はじめにヤーコラ元議長が奈井江町の開町 50 年記念式典に参加し、現在まで交流を続けています。両町では、状況など大分違いますがチャレンジすることは同じです。高齢化や都市部への若者の流出問題などに対して、新しいアイデア・やり方・考え方を習うことができました。感謝します。

また、奈井江町を訪れた人でなければ、奈井江町から受けたおもてなしの暖かさは理解できません。将来も交流が続くことを願っています。

私たちの協力と交流は、デジタル化によって新しい方法で進めることができます。インターネットを介し会うこともできます。

両町の人々に、おめでとうと言いたい。時代が変わっても尊敬することは大変大事なことです。将来も同じく尊敬しあい、交流を続けましょう。」

最後に、「何があっても、この交流が今後も継続するよう、町の職員に対してヤーコラ元議長が強く、強く、言っています。」とユーモアを付け加えていました。

続いて、30 年前の友好都市調印に携わったヤーコラ元議長が、「奈井江町に滞在した期間、まるでエリザベス女王と同様のような親切的扱いをいただきました。滞在中は、フィンランドの福祉や政治などのたくさんの質問責めに合いましたが、あの一週間は、私の人生で最高の時間でした。素晴らしい経験ができたことに感謝します。ありがとう。」と述べられました。



会場では、当町へ訪問歴のある懐かしい顔ぶれがあり、それぞれの思い出話で溢れていました。

【 フィンランド流 おもてなし 】

29 日午前、ハウスヤルビ町に隣接するヒュヴィンカー市を訪れ、住宅フェアを視察しました。

民間企業が敷地内の公園や道、備え付けの備品も含めて造成・建築・分譲しており、設計士が日本庭園をイメージして造り上げたその景色は、私たち日本人から見ても「和」を感じられる情景として記憶に残るものでした。

フィンランドの方々からも好評をいただいているとのことで、ここでも両町（両国）のご縁を感じられました。



夕刻、ホームステイ先から学生らと合流し、ハウスヤルビ町職員やホストファミリーも交えての交流会が町営キャンプ場で行われました。

交流会では、フィンランド発祥の伝統的なスポーツであるモルックを含めた種目を、両町の子どもから大人まで混合で編成されたチームに分かれて、ゲーム形式で競い合いました。世代と言葉の壁を乗り越えて、ゲームの成績に一喜一憂する楽しい時間を共有するものとなりました。



一通りのゲームをやり遂げた後、いよいよフィンランドの「おもてなし」として世界的にも有名な「サウナ」での交流が始まりました。

フィンランド式サウナは、2000 年以上もの歴史があり、サウナ（Sauna）という言葉も、フィンランド語です。北欧の地であるフィンランドでは、冬期の日照時間がとても短く寒さも大変厳しいため、冷えた体を温めて疲れをとることを目的としてサウナが発案されたとのことです。

このフィンランド式サウナでは、ロウリュが基本で、熱した石に水をかけて蒸気を発生させ、体感温度と湿度を上げることが特徴となっています。温度は

80度ほどなので、日本の基本的なサウナよりも息苦しくなりません。サウナが苦手な方でも、機会があれば挑戦してみることをおすすめします。

また、火照った体のクールダウンには、水風呂代わりに隣接する湖に豪快に飛び込みます。「おもてなし」に対する無礼のないよう、しっかりと準備を整えてから湖に飛び込むこととなりますが、やはり外気の気温の低さと合わせて「寒さ」が勝りますので、再度サウナに戻り、再度湖に飛び込むクールダウンの繰り返しになります。



サウナハウスから湖を
望む…絶景かな

たっぷりとサウナによる「フィンランド流 おもてなし」を堪能した後は、キャンプセンター室内で夕食会となりました。

この夕食会でも大変な歓迎を受けるものとなりましたが、特にギターの生演奏による引き語りや、私たちのリクエストを受け、日本でも馴染みのある英語による曲やヘルシンキ出身の世界的にも有名なミュージシャンの曲の演奏時には、参加者全員での盛り上がりを生むものとなり、楽しい時間は一瞬で過ぎ去りました。

このような大変心温まる歓迎を受けるなか、私たちは明日からの行政視察や施設訪問に挑むこととなりますが、改めて両町の発展と交流に対する想いの意を強くすることとなりました。

【 まちづくりの課題 】

30 日午前、ハウスヤルビ町の行政に関するプレゼンテーションを受けるために到着した庁舎は、建設から 40 年以上の月日経つと、町としては 4 年前に開基 150 年を迎えています。

ハウスヤルビ町の抱える問題についても、当町と同様に少子高齢化と若者の都市部への流出が進んでいる状況となっており、如何に人口を増やしていくか、如何に企業を誘致するかが行政の喫緊の課題となっています。



フィンランドの人口自体は、もうすぐ 600 万人に近づいていますが、ハウスヤルビ町を含む 11 の自治体で構成するカンタハメ地区については、年々人口が減少しており、ハウスヤルビ町の人口は、約 8,000 人ですが、年間約 1%程度の減少が続いています。失業率は現在、約 7.4%から約 6.0%に改善したことにより、カンタハメ地区で下から 3 番目に低い状況となっています。

市町村税率が 8.9%となっており、この税率は各自治体が自主的に決められる数字となっていますが、現在、9.3%に引き上げざるを得ないかとの議論が進められています。

財政状況については、今年の予算規模が 2,470 万ユーロ（1 ユーロ 160 円換算で 39 億 5,200 万円 ※奈井江町 令和 6 年度当初予算 56 億 6,700 万円）。建設事業で 300 万ユーロの投資を行っており、一番大きな事業としては、多目的ホールの建設を進めている状況になります。

歳入では、予算規模のうち税収が 1,800 万ユーロ、国からの補助金が 440 万ユーロとなっています。



これまでも、税収だけでは賄えない自治体が多いことから、国が助けの手を差し伸べるべきという交渉が持たれましたが、現在の方向性としては、それぞ

れの自治体が出来る限り自助努力で行いなさいということで、国からの補助金が減少する傾向にあり、来年度の予測については、国からの補助金が440万ユーロから100万ユーロ減り、340万ユーロとなることから、何とかしなければならない状況にあり、市町村税率を8.9%から9.3%へ引き上げることは、国からの補助金が減少する部分への補填であるとのことでした。

交通網や上下水道などのインフラ関係については、特に上水道については、飲み水であることから、どこから取水するかの部分が重要となります。この地区は水源がつながっているのでハウスヤルビ町だけで完結する話ではないので、周辺の自治体と共同で行っているとのことですが、下水道などについては、単なる更新ではなく、新しい技術を積極的に取り入れた革新と言えるような整備が進められています。

今後のまちづくりの方向性についてですが、フィンランドでは、統一地方選（4年に1回）が来年の春に行われ、議員等の顔ぶれが変わります。春に選出された議員が秋の段階で招集され、新年度という形になりますが、そのときにこれから4年間のハウスヤルビ町の生き残りの戦略を考えていくことになるとのことでした。

フィンランドでは、十数年にわたり社会保障大改革を進めてきており、それぞれの自治体だけではなく、もう少し大きく、郡というくくりでヘルスケアや様々な社会保障サービスを提供することになっており、ここに消防なども加わります。フィンランドの国の総予算のうち、4分の1がヘルスケアと社会保障サービスに割り当てられ非常に大きなものとなっています。ハウスヤルビ町が属するカンタハメ地区の予算は8億ユーロとなっており、このうち1億ユーロが自己負担での使用料（治療費等）で、残りを国が負担することとなっています。

以前は各自治体がヘルスケアサービスの実施主体でしたが、現在は国が費用を賄っている状況となっており、国が工面するこの費用の財源とするために、自治体への補助金を減少させているとのことでした。

このような背景を受け、ハウスヤルビ町を含む11の自治体が連携し、地方の郡としてのつながりにおいて、どのように自分たちが受けられるべき補助金をしっかりと確保していけるのかなどを研究し、1ヶ所だけで行うよりも、力を合

わせた方がより手が回りやすい部分があるということで、共同で行っているとのことです。

また、教育関係での特色ある取り組みとしては、ハウスヤルビ町を含めた4つの自治体が協力体制を築いており、4つの自治体が出資して株式会社形式を取り、教育に関する支援を行う会社を設立し、義務教育が終了したあとの職業専門校として、若い世代が周辺の企業などに労働力を提供できる仕組みとなっているとのことです。

フィンランドでは数十年に一度の大きな社会保障改革が行われましたが、これまで自治体が担っていたヘルスケアが国の管轄となり、この大きな改革が実施されて1年ほど経過しました。以前は教育に加えてヘルスケアが自治体の提供する二大サービスでしたが、ヘルスケアの部分を国が担うこととなり、逆に国が担っていた失業対策について自治体が担うこととなったところです。ハウスヤルビ町については、以前と比べるとヘルスケアという大きなコストがかかるものが減ったことにより、町の総予算が以前の半分ほどになっています。

最後に、日本と同様の問題を抱えていることについては、高齢化、少子化となりますが、以前は年間120人ほどの出生数がありましたが、現在は60人前後となり、出生率の低下については、フィンランドはもとより欧州全体が抱える問題であるとのことです。

この問題の解決には、海外からの人材受け入れしかないとのことで、ハウスヤルビ町においても移民・移住対策の担当者を配置して対応を進めているとのことです。



ハウスヤルビ町の議場で紹介を受けました。

【 社会保障大改革後のヘルスケア 】

施行されたのが 2023 年 1 月 1 日。これまで自治体が担っていたヘルスケアや消防などが郡単位（22 ヶ所）での所管となりました。フィンランドの歴史においても最大の改革であり、なぜ行われたかについては、次の 3 つの大きな目的があります。

1. 全国各地で同様のサービスを受けられるようにすること。
2. ヘルスケアについての格差を無くすこと。
3. 増大する費用を抑えること。

現在、郡自体では課税する権利はないので、費用については国の補助金となっていますが、これを変えた方が良いのではという議論が進んでいるとのこと。費用がどのように国から交付されるかについては、不健康な住民が多い地域に多く交付されることから、健康な住民が多ければ交付される金額が少なくなるとのことで、需要に応じたものとなっており、郡が受け持つ分野ですが、社会保障、ヘルスケア、消防（レスキュー）等となっています。

ハウスヤルビ町の属する郡（カンタハメ地区）の人口は合計 17 万人で、関わる職員数は 7,200 人となっています。年間の予算は 8 億ユーロ、その内 7 億ユーロが国からの補助金で、残りが治療費など患者から徴収する分となります。

意思決定については、トップに関しては、郡の運営を行う上で新たに行った選挙で当選した人たち 19 名（9 政党）となっています。その次に行政委員会（13 名で構成）があり、決定した内容を下部組織に下ろしていくことになります。

また、行政委員会の下に 4 つの委員会があり、それぞれの分野ごとに、健康促進に関する委員会（13 名）、人生全般の健康をみる委員会（13 名）、安全に関する委員会（13 名）、調和に関する委員会（16 名）となっています。

この他、独立した組織として若者で構成する委員会、高齢者で構成する委員会、障害者で構成する委員会があり、それぞれのサービスを受ける立場の人たちから各自治体が代表者を送り込んで、権利というものをしっかりと確認することを目的としており、法律に定められています。

もう一つ、外部から活動の監視を行うことを目的とする監査委員会があります。

社会保障、ヘルスケアについては、元々大きなコストがかかる分野ですが、自治体の場合は年度の途中でお金が足りなくなれば、例えば来年度から予算を増やす決定ができますが、この形態での運用では、それができません。途中でコストの変更にかかる審査をすることはできますが、かかり増しのコストは他の事業から持ってくることになり、借金もできなければ、税率を上げることなどができない状況となっています。

この社会保障制度大改革後の現在、目指すべきところは、サービスをしっかりと提供すると同時に費用を削減することであり、この二つの大きな目的が、矛盾するように聞こえますが、どう実現していくかについては、デジタル化による遠隔医療なども方法の一つとなりますし、訪問看護・介護についてもより一層推進している状況となっています。

提供するサービスの質と量については、以前はそれぞれの自治体が介護施設・サービスに関して民間に業務委託することが主流でしたが、現在は、郡（カントハメ地区）単独での契約に切り替えています。

費用を削減することについては、外部との連携などに要するコストが生じないように、できるだけ郡の病院で対応することを目指しています。

また、特に衛生面で気を遣う病院などの施設における清掃や食事提供については、郡として共同で一つの会社を立ち上げて、そこが全部担当することにより、コストを抑制するなどの取り組みや、組織面ではリストラによるスリム化も行っています。

今後のサービス提供の展望については、ファースト・トリアージの徹底、老衰や末期がん患者等への緩和ケア、急性期の治療を推進していくこととし、訪問看護・介護についても高齢者だけではなく、乳幼児から寿命を迎える年齢まで全ての方に幅広く対応できるよう、車両による登録制の移動病院機能の進展とともに新たな技術、イノベーションについても常時取り入れることができる体制を整えて対応していくとのことです。

【 一人ひとりの顔が浮かぶ教育 】

カレンダーが 10 月に変わった 1 日、教育施設を視察しました。

リュッティラ学校は、ハウスヤルビ町のリュッティラ地区にあり、町の中でも 2 番目に新しい学校となっており、3 つのフェーズ、最初にプレスクール（保育所）、その後古い建物をリノベーション、最終的に、2021 年春に特別教室や給食スペースなどがある新校舎を新築する形で 2021 年に完成しました。



その中で最初に案内されたのはプレスクールでした。私たち訪問団に対し、興味津々で話しかけてくる子、恥ずかしそうにニコニコこちらを見る子、反応は様々でしたが、子どもの可愛さは世界共通だと思いましたし、森岡議長が「子どもは天使だな」と度々呟かれていたことが印象に残っています。本当にそのとおりだと思いますし、その子ども達がこれからの未来を創っていくと思うと、やはり『教育』とは、とても大切なものなのだと、改めて考えさせられました。

フィンランドでは、子どもの保育を受ける権利が保障されているので、親が仕事をしていなくても保育所を利用することが可能となっており、3～5 歳の子どもたちが、朝は午前 5 時 30 分から午後 6 時まで過ごすことができます。朝食は、保育所にて提供され、保育料は個人負担になっています。お昼寝の時間は午後 0 時～3 時までで、お昼寝をしたくない子は、先生による読み聞かせや静かな活動をしながらか過ごすことが可能で、集団で同じ行動をする必要がなく、幼少の頃から自ら選択できる環境があると感じました。



フィンランドの保育利用率は、OECD 加盟国の平均でいくと比較的低くなっていますが、それは、国が法律で育児休業を 3 年間取得できる権利を保障しており、3 歳までは、親が子どもを自宅で育てることが多く、育児休業後は、職場

復帰し、フルタイムで働くことが通常であるということでした。育児休業を 3 年取得できるのは、日本でも権利として保障されているところではありますが、完全取得ができる環境は、日本とフィンランドで大きく違っているのだと感じました。また日本が、『働く親のための保育』であるのに対し、『子どものための保育』であり、行政は、子どもたちのために、十分なスペースと環境を整備する義務があり、待機児童はゼロということにも驚かされました。ただその代わり、自宅近くの保育所に通えるわけではなく、保育申込書を提出した際に、空いている保育所に通う必要があり、兄弟姉妹であっても、いっしょに通えるとは限らない現実もあるとのことでした。

プレスクールの後は、小学校の特別教室や給食室がある棟を案内いただきました。技術室には本格的な機械が整備され、先生方も本格的な作業ができる部屋も用意されており、子ども達も望めば、その部屋や機械を使用することもできるということでした。フィンランドは木材も豊富であることから、小さいころから木材を加工する技術を習得できる教育がされているということでした。また、家庭科教室には、台所、洗濯機、アイロンなど一般生活を最低限送ることができる教育を行える備品も整備されていました。音楽を楽しむスペースとして、子ども用サイズのギターやドラム、電子ピアノといった楽器がすぐ手に



取れるよう用意され、好きなようにセッションできる空間が設けられていました。これは、『奈井江版生涯活躍のまち』の中の取り組みの 1 つでもある『まち中音楽』活躍システム構築を推進している当町にとって参考にできるのではないかと思います。

次に、実際に子どもたちが使用している教室を案内いただきました。実際にみた 1 年生の教室は、まさに 8 月から通い始めたばかりで、まだ 2 か月足らずのピカピカの教室でした。教室の風景は日本とは全く違い、机の形は四角ではなく扇形のような形



で、丸くグループが組みやすくさらに机の脚には車輪がついており、小さい子どもでもスムーズに移動がしやすいような工夫がされていました。また、教室の中にくつろげるソファも配置されており、床や壁も音を吸収するような素材を使用するなど、学校で発生しがちなガチャガチャした音が響きづらく、ゆったり落ち着いた環境で勉強できる環境が整備されていました。

また、奈井江町では当たり前になった1人1台端末も同様整備され、各教室には電子黒板も設置されており、ICTを活用した教育も進んでいました。タブレットの自宅への持ち帰りについても、当町同様、小学校低学年は持ち帰りせず、中学年以降から持ち帰りをさせているということでした。

話を聞いていく中で、フィンランドと日本の学校で異なっていると感じたのは、小学校低学年の子どもたちの授業数は1週間あたり約19時間程度（1日3～4時間）、3年生以上でも約26時間程度（1日5～6時間）と、日本の授業数より少なく、基本的に宿題やテストもないということです。さらに、日本のように塾というものも存在しないため、校外で勉強をすることもないということに驚かされました。とは言いながら、フィンランドの教育は世界一とも言われており、その理由は、強制された勉強ではなく、on・offを意識しながら、自発的な取り組み姿勢から生まれるものなのだろうと思いました。



長い歴史の中で培われたお互いの国の教育の土壌は、一朝一夕で変わるものではないと思いますが、せめて奈井江町の子ども達には、受動的な学びや成績主義ばかりではなく、能動的な学びができる子に、学ぶことが楽しく、自分のなりたい将来像に向かって歩いていける子に育てて欲しいと願い、これからの教育施策を推進していきたいと思いました。

エスコ学校は、ヒキア地区にある学校で、組織として、プレスクールと普通小学校1～6年生、そして、障がいを持つ子どもが通う学校（特別支援学校）1～9年生（今年は15名）があり、2010年秋に開校しました。





このエスコ小学校では、お昼時間の訪問ということもあり、ランチに学校給食を体験させてもらいました。品数は多いとは言えませんが、家庭的な味でとてもおいしくいただきました。特に、ソーセージとじゃがいも、野菜たっぷりのスープは、連日、外国料理を食していた私たちの胃袋にホッと染み入る優しい味で、訪問団の中には、おかわりをする人もいたほどです。

ここで少しフィンランドの給食の特徴について触れたいと思います。フィンランドは、子どもたちの育成と教育をサポートすることを目的として、1943年に世界で初めて学校給食の無償化について法制化を始めた国でもあり、給食はすべて無償となっています。

そして、学校内に食堂（カフェテリア）があり、子ども達や先生が集まり、学年ごとに時間をずらしながら給食を食べます。ビュッフェ形式なので、食べたいものを食べたい量だけ食べることができます。

ハウスヤルビ町の給食は、中学校にセントラルキッチンが併設され、市町村全域の学校やプレスクールの給食を調理しています。給食は、セントラルキッチンである程度まで調理され、各学校のサービスキッチンに配送されます。そして、最終的な調理の完成をサービスキッチンで行い、出来立ての食感が保たれた、おいしい給食の提供を実現していました。

給食の後は、学校の体育館や特別支援学校の授業の様子を参観しました。

体育館は、学校だけの施設としてではなく、広く町民に開放され活用されているということで、これからの奈井江町の公共施設の活用の在り方としても参考になると思いました。

学校を案内していただく間の雑談の中で、学校と保護者の関係についても話題になりました。エスコ小学校ではPTA活動も活発で、保護者の方が、年に数回バザーを開催し、その収益で学校へ教材等を寄贈したり、学校運営にも協力的であるとのことでした。こういったPTA活動は、ハウスヤルビ町全ての学校ということではなく、エスコ小学校の保護者が伝統的に協力的であり、そもそもの学校の文化として、家庭も一緒にやりましょうということで学校に携わってもらってきた歴史によるものかもしれないと話されていました。奈井江町でも、昨年度より地域とともにある学校、地域と家庭と学校で子ども達を支える

枠組み（CS）がスタートし、これから組織を熟成させていき、地域とも連携した活動を行いたいと考えているが、なかなか進んでいかない現状があるとの話をしたところ、「参加型の実行はなかなか難しい。トップダウンではできないし、一緒にやりましょうというゼロから創り出す難しさがある。しかし、どんなことでも開始するときはそういうもの。スタートすることが大事。始めなければ始まらない。奈井江町は今が出発点なのですね。」とのアドバイスをいただきました。できない言い訳ではなく、できることから始めることが大切だということ、そのとおりだと思うとともに、フィンランド人の意志の強さを感じる言葉でもありました。

体育館から特別支援学校への移動の際に、特別支援学校における説明がされました。ハウサルビ町では、障がいを持つ子ども達は全員この学校に通学しており、教諭が3名とアシスタントが10名配置されているとのことでした。

また、フィンランドでは、普通学校の学童保育と同様に、障がいがある子ども達のために障害者法により、希望によって朝6時30分と午後5時までの学童保育が利用可能となっています。通学の方法は、子ども達それぞれに身体的理由や特性があるので、全員タクシーを利用しており、料金の負担としては、義務教育の時間帯であれば公費負担、学童保育時間帯であれば群の管轄になるとのことでした。

ちなみに、ハウサルビ町では、全体教育費予算1,300万ユーロの内100万ユーロ（約7.7%）が学校登校予算に使用されているとのことでした（スクールバスは、学校から3km以上離れている場合利用可能）。

また、フィンランドでは、特別支援教育の教諭の配置基準として、6人に対して教諭1名の配置が必要とされていますが、日本のように、各教諭が障がい区分（知的、情緒、病弱、言語など）に応じた担任を持つということではなく、その日の活動やその日の子ども達の状況に応じてグループ分けを行い、日々臨機応援に対応をしているとのことでした。そのため、特別支援教育を行う教諭は、区分全ての教育ができるような体制を整えているとのことでした。

特別支援学校の1日の過ごし方は、朝通学してきたら、まず全員が輪になり1日のスケジュールを確認。その後、午前中の時間をかけて外遊びをし、給食を

食べた後、午後からは特性ごと（臨機応援に変化）に分かれ、2 時間程度勉強をしてから帰宅するのが一般的だということでした。

また、エスコの学校では普通学校とも併設されているため、普通学校における特別支援教育教諭も配置されており、その教諭は、多動や落ち着きがない子、集中力が低下しているなど、課題を抱えた子どもの支援を行っているとのことでした。

私たち訪問団は、特別支援学校の授業の中で、知的クラスの国語の授業と家庭科の授業を参観させてもらうことができました。

国語の授業のクラスの子ども達から私たちに「ここまで来るのに何時間かかるの?」、「ムーミンは好き? キャラクターは何が好き?」といった質問がされました。

家庭科の授業では、子どもたちがアップルパイを調理する授業が行われており、子どもたちにとって、料理は日常生活を送るための大切なスキルであると位置づけられているとのことでした。私たちが参観した時は、皮むき用カッターでリンゴの皮むきをしているところでした。日本の包丁を使う向き方とは違い、リンゴの皮を削るように剥いていました。また、日本の切り方とも違い、子ども達から「日本ではどのように剥くの? どんな切り方?」という質問があり、町長自ら皮むきの実演を行い、子どもたちからは歓声が上がっていました。こういった些細なことでも、生活文化の違いを感じる交流ができたことは、私たち訪問団やフィンランドの子ども達にとって貴重な体験だったと思います。



2 つの授業を参観した後、私たちは学校の外へ案内されました。丁度その時間帯は、午後の授業が終わった時間帯で、外で遊ぼうとする子ども達と

「Moi! (こんにちは)」と声を掛け合いながら、玄関前にある遊具の横を通り、すぐ裏手にある山へ行きました。山への道は緩い坂道で、中腹の平地には、



トレーニングジムにあるような立派なトレーニング機器が設置されており、町民誰でも自由に使用できるようになっていました。さらに、中腹以降の坂道は

入口付近よりも急な勾配になっており、私たちがトレーニング機器を見学している間にも、ランニングをしたりペットの散歩をしている方がおり、健康意識が高く、自然を楽しむフィンランド人の姿がそこにありました。

★フィンランドの各学校で共通していたこと

○保健師、カウンセラーの配置

常駐の保健師（1校に1名）、カウンセラー（平均2校に1名程度）が配置されており、日常的な子ども達の心のケアを保健師が、その中で心配や不安のある子どもの対応をカウンセラーへ引き継ぐという体制を整備していました。

また、昨今、フィンランドでも特別支援教育やカウンセリングが必要な子どもの数が増加傾向にあり、保健師やカウンセラー、特別支援教育教諭の役割が大きくなっているとのことでありました。

○職員室がない

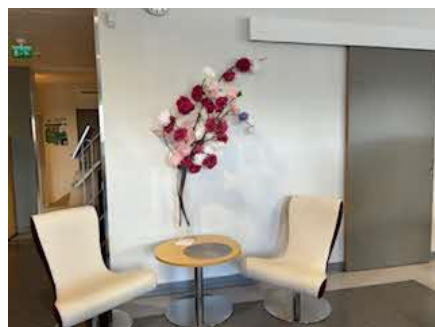
フィンランドの学校では、日本のような職員室はなく、教諭の机は各教室に配置されており、教諭が集まる部屋はあくまでも休憩室兼ミーティングルームとなっています。

まるでカフェテリアのような空間となっており、職員みんながリラックスし、気軽にディスカッションできる環境を整備しているということでした。



2つの学校を見学した後、案内をしてくれたヨーナスさんの言葉…

「こうやって学校に来て、子どもたちと会話をすると、まだ小さかったその子と交わした言葉や表情が今でも蘇ってきます。私はこれからも“一人ひとりの顔が浮かぶ教育”を続けていきたいと思っています。」…一人ひとりと向き合うフィンランドの教育にとっても感動しました。



ちょっと一休み...



ヤーコラ元議長の私邸を表敬訪問。
当時のアルバムを開きながら、両町の思い出話をたくさん聞かせていただきました。
また、広大な敷地内の案内を受け、フィンランドの歴史を感じられるような秘蔵コレクションも拝見しました。



ティーパナ議長に準備いただいた
大自然を堪能しながらのBBQ

【 時代の転換に順応する気質 】

2日午前、ハウスヤルビ町内で操業するベンダーズ社を視察しました。同社は、主に建材やエレメント、外壁用のガラス・金属類を製造しており、その他にも不動産やレストラン経営、競走馬のオーナーとしての顔も持ち合わせています。



1960年に創業し、この地区に進出したのは1970年とのことですが、これまでも親会社が数回変わっているとのことで、昨年、スウェーデンを拠点としている現在の親会社からの買収提案に対して、うまくマッチングしたことにより現在に至るとのことですが、従業員のみなさんについては、全員そのまま雇用されており、親会社が変わることについては、慣れごとなので平常心で仕事に従事できているとのことでありました。



また、新興感染症によるパンデミックの影響については、法人向け事業の減少に伴い営業収益が下降することになりましたが、業界全体でひきこもり需要が伸びたことより、個人 90%、法人 10%の営業形態により何とか乗り切ったとのことでありました。

続いて、主にカレーの香辛料として使われる「クミン」と、油やプロテインの材料となる「ヘンプシード」を製造し、世界中に輸出しているトランス・ファーム社を視察しました。

現在、クミンは 15,000ha、ヘンプシードは 1,500ha の規模となっており、町内で営農する事業者と栽培契約しているとのことですが、今後もし取り扱う商材の拡大を計画しているとのことです。

夕刻、ニ克蘭ディアでの送別パーティ



【 日本の若者を世界に 】

フィンランド滞在最終日、学生らと合流し、ヘルシンキ市内にある日本大使館を表敬訪問しました。

大使館では、岡田 隆 大使、三浦 篤 一等書記官、長野慎一 専門調査員に暖かく迎えられ、1時間という短い時間でしたが、大変有意義な懇談となりました。

ハウスヤルビ町との交流が30年もの長きにわたり続いていることに評価をいただくなか、今回の滞在期間中に学び・感じ取ったことなどを訪問団員それぞれが報告しました。

岡田大使からは、フィンランドの現況をお話いただきましたが、今回の滞在期間中に感じたフィンランド人の気風や視察・訪問先での様々な状況や手段の変化への高い順応性については、国民性として、地続きの隣国の紛争を火種とする厳しい社会情勢に対しても、これまでの歴史的な経験を活かし、備えを怠らずに平常心で生活していること。このような背景があることから、日常生活の基礎となる社会保障制度やインフラについても、革新していくことに積極性があるとのことでした。



岡田大使を中心に、
緊張の中にも笑顔で

最後に、「日本の若者たちが国際社会に興味を持ち、視野を広げて世界に羽ばたいていくことを期待します。」とのお言葉をいただき、帰路に着くことになりました。

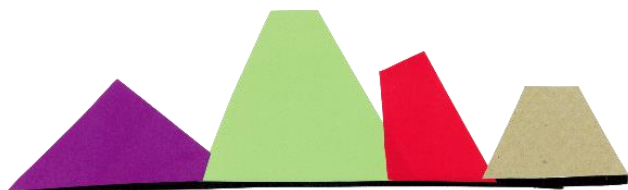
【 おわりに 】

今回のフィンランド滞在期間中、ハウスヤルビ町のみなさんをはじめとし、視察・訪問先のみなさんにおかれましても、本当に温かく、懇切丁寧に接していただきました。友好都市の提携が行われて30年という歴史の積み重ねにより育まれた両町の信頼関係。本当の意味で「絆」が感じられる大変有意義な時間を共有させていただくことができ、深く感謝申し上げたいと思います。

これからも友好都市としての交流を通じながら、これまでの歴史と共に新たな意義についても見出し、絆がより一層深まるような国際交流事業の進展を期待し、今回の報告といたします。



お世話になった全てのみなさまへ…… Kiitos ! !



ハウスヤルビ町視察団としての9日間を終えて

町民代表 山田 このみ



この度、奈井江町とハウスヤルビ町が友好都市交流30周年を迎えるという記念すべき年に、視察団の町民代表としての参加をご快諾いただきましたこと、心よりお礼申し上げます。

私がフィンランドに興味を持ったのは中学生の頃、インテリアやテキスタイルデザインに強く心を惹かれ、社会人になった後に念願を叶えて初訪問を果たし、フィンランドが独立100周年を迎えた記念すべき2017年に当時22歳の誕生日を現地で迎えたという大切な思い出があります。

その後夫の地元である奈井江町に移って参りましたが、フィンランドの町と友好都市であるを知ったのは移住後のことで、ハウスヤルビという地名はその際に初めて耳にし、チャンスがあれば一度現地に赴いてみたい…と密かに思っていたところに今回の募集が発表されました。後にも先にも一度きりだと思っていたフィンランドにまた行くことができるかもしれない！そんな期待感に胸を躍らせながら、いざとなると「私じゃ分不相応だよな」「子どもは連れていけないし」と弱腰になっていたところを夫が背中を押してくれ、おもいきって一歩踏み出し「ずどーん」と応募することを決意しました。

結果としてご縁を頂くことができ、決定通知を受け取ってから出発までの1ヵ月半は何をしていても気もそぞろで必死に荷造りをした日々でしたが、大好きなフィンランドに向かうために頭を悩ませる日々はあわただしくも充実していました。

そんな経緯から参加させていただいた今回の視察において、一般主婦としての視点からハウスヤルビ町の魅力的な施設の紹介や、学校視察で感じた日本との違いを共有させていただきたいと思います。また、出発前の事前研修では「フィンランド」という括りでのざっくりとした解説があったものの、肝心の「ハウスヤルビ町」のことはよくわからないままに出発してしまったため、訪問先ごと異なる地名に頭が追いつかず、帰国後に位置関係を把握して記憶を整理するのに時間を要してしまいました。そのためこのレポートでは、ハウスヤルビ町内の地域の紹介も少しだけ交えて書かせていただきました。次回の視察訪問に携わる方や、フィンランドではなく「ハウスヤルビ町」のことをもう少し詳しく知りたいという方へ少しでも情報提供となれば嬉しいです。



(引用：hausjarvi町ホームページ <https://hausjarvi.karttatiimi.fi/>)

まずはハウスヤルビ町について簡単な基本情報を紹介します。

Hausjärven kunta (ハウスヤルヴェン クンタ) = ハウスヤルビ町 (自治区・市) とも訳され、フィンランドの首都ヘルシンキにあるVantaa (ヴァンター) 空港から北へ車で約1時間のところに位置しています。ハウスヤルビ町にはoitti (オイッティ)、Hikiä (ヒキア)、Ryttylä (リュッティラ) という3つの主な集落があり、そのうち役場のあるオイッティは「自治体的な中心地」としての役割を果たしています。この3つの集落は札幌でいえば「区」だと捉えるとイメージが付きやすいかもしれません。オイッティとリーヒマキは車で約15分、ヒキアは約10分、リュッティラは約17分程の距離です。宿泊したホテルはお隣のRiihimäki (リーヒマキ) 市にあり、ハウスヤルビ町の中心地オイッティとは車で約20分の距離でした。

オイッティには役場庁舎、図書館、保育園、私立幼稚園や家庭保育所 (※保育資格保有者の自宅で最大4人まで預かることができる制度) があるほか、新しい校舎が完成したばかりのHausjärven yhtenäiskoulu (ハウスヤルビ統一学校) があるなど、コンパクトながらも満ち足りたサービスを受けられるまちづくりが進められています。中学校と高校はハウスヤルビ地区でオイッティにしか設置されていないため、ほかの地区の子供たちは中学校からはこちらに通うことになるのだそうです。今回は教育長であるヨーナスさんが引率をしてくださったため、実際に学校の視察をしながら設備に対する様々なこだわりを伺うことができました。



Hausjärven kunta (ハウスヤルヴェンクンタ) = ハウスヤルビ町役場の中には広々とした議場や控室のほか職員の仕事場もあり、入ってすぐのエントランス部分の雰囲気は奈井江町の公民館にも似ていましたが、全く違うのは一部がアパートのようなつくりで職員一人一人に個室が与えられているという点でした。一人につき10畳ほどありそうな個室の中は個性豊かな装飾がなされており、それぞれ仕事に楽しんで取り組

んでいるように感じたほか、ドアにマグネットを貼ることで職員同士が互いに感謝の気持ちや労いを伝えることができるというという遊び心にあふれた仕組みが確立しているなど、和気藹々とした様子がありました。

オイッティの図書館は天井が高く、窓の大きい開放的なつくりが奈井江町図書館とも似ており親しみを感じました。カウンターは円形で職員さんが館内を見渡しやすくなっており、放射状に配置された書架の組み合わせで太陽の形をイメージしていると教えていただいたときは海外ならではの斬新な発想に驚かされました。機会があれば改めて上から太陽の形を確認してみたいです。館内は比較的コンパクトで通路幅も必要最低限という感じでしたが、天井の高さと照明の明るさで狭さは全く感じませんでした。中に入るとすぐ目の前には大きなパラソルがあり、外の景色と相まってまるでテラス席のような空間になっておりとても素敵でした。壁には美しい柄のカーペットが吊り下げられていたり、限られたスペースを活かしながら落ち着く空間を演出するディスプレイ方法には海外らしいアイデアが満載で見えていて楽しかったです。積極的に面出しの展示も行っており、本屋さんのようにふらっと立ち寄って表紙を眺めるだけでも楽しめそうです。

入り口付近には廃棄本コーナー（リサイクル市？）と、ボードゲームコーナーが常設されており、図書館でのボードゲームの貸出は日本ではまだ珍しい取り組みなのに加え、ゲームソフトの貸出まで行っていると聞き驚きました。その他の珍しい取り組みとして、「読書犬」を招いてのイベントがあると聞き興味深かったです。きちんとトレーニングをうけた犬だけが「読書犬」としての資格を得ることができ、読書犬は子どもたちが読み聞かせを行っている間、静かに耳を澄ましてお話を聞くことができます。イベントでは、読書犬に対する音読体験を通して、子どもたち、特に吃音のある子や学習障害のある子であっても間違いや音読の上手い下手といったことを全く気にせずに、本を読むことにポジティブな気持ちをいだけるようになること、声に出して読む楽しみを感じることを、を目的としています。フィンランドではもう10年ほど前からこの教育法が取り入れられているそうです。私自身、学生時代からあがり症なところがあり授業中の音読は大の苦手だったので、子どものうちにこのような体験をしたかった…と思いました。

今後オイッティの図書館では、さらに遊び道具（ボールやフリスビーなど）の貸出サービスも検討しているとのこと。オイッティのようなコンパクトな町だからこそ実現できる、幅のあるサービス提供が奈井江町でも実現したなら、地域住民への居場所の提供という観点からもっと図書館のニーズを高められそうだなと感じました。



オイッティにあるハウスヤルビ統一学校は平屋建てのシンプルな外観で、「廊下」というスペースがほぼない開放的な作りになっていました。室内は全面カーペット敷きのため、靴はエントランスで脱ぐか靴底カバーをすることになっていました。日本では上履きを履く文化があるので、こちらでは靴下のままだったの

が意外な発見でした。カーペット敷きである理由は、机や椅子を引く音・物を落とした時の音の反響を抑え、子どもたち自身の話し声も適度に吸収して静寂を保つための配慮だそうです。

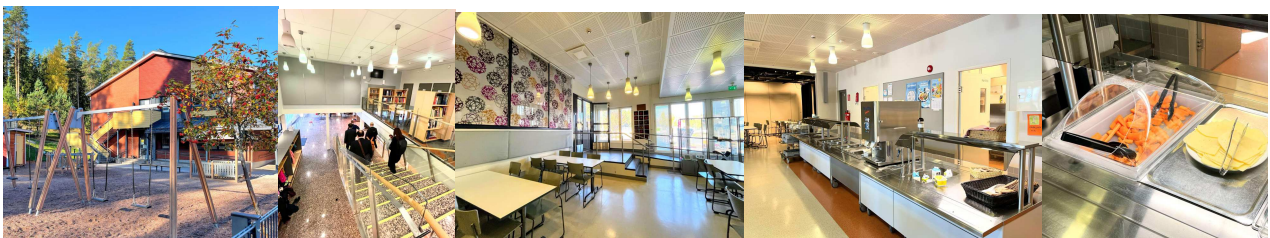
さらに教室を仕切っている壁は分厚い防音素材でできており、ひとたびドアを閉めれば教室内の話し声は廊下やほかの部屋には漏れません。学校生活のマナーとして「廊下は走らない・大声でしゃべらない」というのは日本でも一般的ですが、なかでも「静寂」におけるルールはフィンランドのほうが徹底されているように感じました。

しかし、「静かにしなさい」と幼少期から大人が言い聞かせるのではなく、さりげない張り紙や騒音を可視化するツール（信号機型のノイズレベルモニター）を使用して、あくまでも子ども主体で「気づきを促す」方法をとっていることが、日本とは違い理想的な方法だと感じました。それぞれがまわりに配慮して静寂を保ちあうことは、互いにとって、騒音を我慢させられたり、集中力を乱されるというストレスの原因を排除することができますし、感覚過敏の有無にかかわらず、どの子どもも「等しく」集中できる合理的配慮に基づいた環境づくりに直結しているのだと思います。

次に、ヒキアには2010年に開校したEskon koulu（エスコンコウル＝幼稚園・小学校）があり、ここには特別支援級が2クラスあります。一般クラスの中の「配慮が必要なグループ」とはまた別で、自閉／知的／身体的障害などがあるお子さんがこちらのクラスを利用することができ、ハウスヤルビ町内全体から現在15名程が通っています。

特別支援級では「障害の程度」というよりも「できること」「できないこと」によってクラスを分けていて、日常生活のスキルを身に付け自立した生活ができるようトレーニングするクラスと、できることを活かして授業を行うクラスがあり、その日の授業内容に応じてメンバー構成はフレキシブルに組み替えられるそうです。

この日は「家庭科」の授業としてアップルパイ作りを行っており、なぜ食事ではなくお菓子作りなのか尋ねたところ、「これも生きていくための大切なスキルだからね」と先生が仰っていてほっこりしました。支援級だからと刃物を使用する工程を省くこともなく、お子さん一人につき一人の先生が個別で見守ることで、子ども本人に経験させている姿勢に好感が持てました。

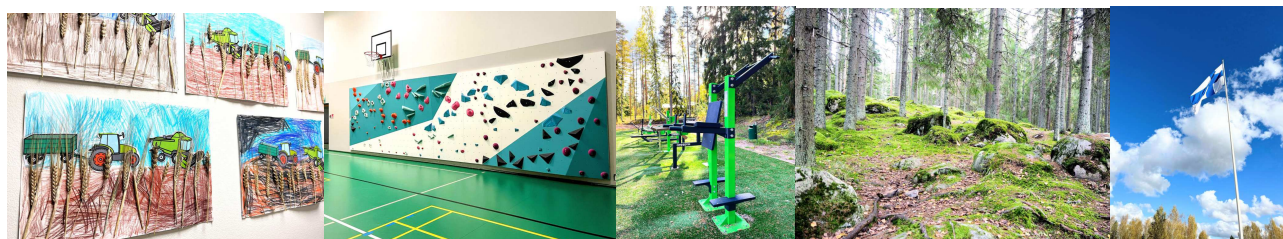


視察後にこちらの校舎で給食を体験させていただきました。フィンランドでは給食は教室ではなく「カフェテリア」に移動して食べ、ランチタイムは11時から始まるのが一般的で、12時には料理自体を片付け始めてしまいます。献立は「料理」というよりは素材を味わうといった内容で、その日はナチュラルチーズ・生の人参スティック・ライ麦パン・温かいスープがビュッフェスタイルで用意されていました。飲み物も自分でコップに注ぐスタイルで、牛乳のほか、オーツミルク・サワーミルクと呼ばれる乳酸菌飲料（乳糖不耐症の方向け）から選べました。

個人の選択の自由を重んじるフィンランドらしいbuffeスタイルは、たくさん食べたい子ども、あまり食べられない子ども自由に量を調節できることは一見するといいことのように感じますが、子どもたちの中にはお皿の底にほんのちょびっとのスープとパン一切れしかよそっていない子どもいて、ひとりの親としての立場

からは心配になってしまいました。「カフェテリアで食べる」という仕組みも、子どもたち一人一人がどの程度食事をとれているか教師は把握できていないのではないかと感じました。「給食＝栄養バランスの整った食事が全員に等しく提供されていること」が当たり前になっている日本の学校給食がいかに充実しているかということに気づかされました。

カフェテリアの一部の天井には照明機材や垂れ幕が設置されたスペースがあり、すぐ隣の体育館側から幕を開くと、まさにそこがステージ舞台の役割も果たしているというのは面白かったです。一つの部屋につき一つの役割で終わらせないことにもフィンランドの合理的な思考が垣間見えました。全体的にホテルのような高級感ある内装が印象的で、幼少期からこのような落ち着いたインテリアの中で育つことに加え、静寂を保つことを習慣化することで、自然と落ち着きのある子どもに育っていくのだなと思いました。



校庭の奥には地形をそのまま活かした森が広がっており、校庭の遊具を通り過ぎてやや急な斜面を登るとすぐそこにはトレーニング器具が設置されています。程よく自然に囲まれ外からの視界を遮られる場所にあるこのジムは、地域住民が自由に無料で使用することができます。屋外に運動器具があることはフィンランドでは珍しいことではないようですが、このような森の中にあえて設置しようという案が「実現されること」からも、いかに日々の生活に「自然」と「運動」を取り入れ、健康づくりをすることを町として推奨しているかが伺えました。

RyttyläにはRyttylän päiväkoti（リュッティラン パイヴァコティ）＝デイケアセンター（幼稚園）と小学校があります。

130年の歴史がある文化保護指定の旧校舎を改装して、さらに3つの校舎を渡り廊下で繋ぎ、一つ屋根の下にすべての学年が集えるようにしているため、非常時には全学年が屋内を通してシェルターに移動できるようになっています。フィンランドでは設置が義務づけられているシェルターは平常時には音楽室や技術室として無駄なく活用されているのが印象的でした。各校舎をつなぐ渡り廊下など無機質になりがちな場所にこそリラックスできる空間が設けられていて、カラフルな配色のベンチや、やさしい色合いのソファが学校のあちこちにあることで、どこにいてもアットホームな空間となっていました。

そもそも学校のあちこちにソファがあるということ自体が日本ではなかなか珍しいことだと思いますが、これを単なる「ソファ」ではなく子どもたちの「居場所」と捉えると、それが学校内に点在することの重要性が増してくるかもしれません。教室以外に子どもたちそれぞれが居心地よく感じる「居場所」があることで、クラスの中だけに縛られがちな子ども達の視野が広がり、他者や環境に依存しない精神的自立が促されるのではないかと思います。フィンランドには「ソリチュード（積極的な孤独）」という言葉もあるほど一人の時間を持つことは大切な時間とされており、大人でも子供でも、あえて一人の時間を持ってリラックスすることは最高の贅沢で、かつ精神を安定させるための必要な時間と考えます。

学校内においても時には教室から離れ、心地よいと感じられる場所に腰を下ろし、自分の心の声に耳を澄ませます。そんな時間の積み重ねが自分の将来を真剣に考えるきっかけになるかもしれないし、自分自身との対話によって意志や考えに自信を持てるようになり積極的に発言することができたり、トラブルに巻き込まれ

そうなときにははっきりと「NO」が言える子に育っていくのかもしれないな、と一人の母親としての立場から思いをめぐらせました。



フィンランドの子供たちは秋ごろからジャンプスーツ（防寒つなぎ）を着用し、雪や雨の日にはさらに着込んで防寒対策をして外遊びに行きます。フィンランドでは天気を理由に外で遊ばないという日はなく、どんなに気温が低くてもよほどの悪天候でない限り、休み時間は外で過ごすことになっているそうです。

そして外に出るためのお仕度は2歳ごろから自分でできるように訓練をはじめます。訓練といってもあくまでも子供主体で、どんなに時間がかかろうとその子自身が着ようと努力するのを先生がそばで見守ります。大人が先回りしてなんでもやってしまったり、周りに合わせるよう急かすことはせず、一人一人のペースを尊重する体制は保護者目線から見てとても望ましいものでした。

廊下には子どもたちの上着を乾かすための乾燥機が用意されており、登校や休み時間の外遊びで上着や手袋が濡れても授業中に乾かしておいてもらえるのだそうです。

帰り道に濡れたままの上着を着る心配をしなくても済むので、休み時間も臆せず遊びに行けますね。一見過剰なように思える設備でも「そんなもの本当に必要なの？」必要性を疑って何も変わらないのではなく、子どもたちが濡れたままの上着を着て風邪を引くリスクが減るし、もっと積極的に外で遊べるようになるんだったらいいよね、と環境整備に積極的にお金をかけている感じが“合理的で未来志向”なフィンランド人らしいな、と思いました。

以上がオイッティ・ヒキア・リュッティラの学校紹介と実際に視察に行った感想になります。どの学校もおもちゃや子どもたちの作品展示がなければ、まるでホテルやカフェなのではないかと思えるほど落ち着いたのあるインテリアに統一されており、その中にちりばめられたカラフルな家具の配色にフィンランドのお国柄が出ていて素敵でした。

真っ白で殺風景に感じる壁があれば、アーティストに依頼してウォールペイントを施す計画を進めていたり、どこにいても誰もがリラックスして過ごせる空間になっているかを重視していることが伺えました。

議員の皆さんとの懇談の席では、皆さんが子育てをする中で大切にしていることはありますかと質問をさせていただき、一人の親としての生の声を聴くことができました。

「毎日そばにいる時間を持つこと。そばにというのは、ただ子供を横に置いておけばいい（いわゆるスマホ育児）という意味ではなく、一緒に時間を過ごし、子どもに意識を向ける時間を大切にすること」ということと、「ティーンエイジャー（思春期）になったときに、子ども自身を一人の人間として認め、決して親の意見を押し付けないこと」という2つの助言をいただきました。私自身もこれからの子育てにおいて、この考え方を忘れずに実践していきたいです。

次に、1件のカフェをご紹介します。Mommilan Kyläpuoti（モンミラン キュラプオティ）＝モンミラヴィレッジショップにはフィンランド2日目の朝に訪問いたしました。レモンイエローの外壁が可愛いその場所は、1898年に建てられた建物を改装して2016年にお店としてオープン。以降お店の方が少しずつ改装に改装を重ね、常にアップデートを続けながら営業しているそうです。



地域のコンビニ兼カフェとしての役割を担うほか、かつての住民が20世紀初頭から個人的に収集した雑貨（主に店で取り扱っていた歴代の商品）を「Kyläkauppmuseo（キュラ カウッパ ムセオ＝ヴィレッジショップ博物館）」として展示しています。入場料は無料で観光客も気軽に立ち寄ることができます。

イベントも積極的に開催しており、クラシックカーやバイクのイベントではフィンランド各地から人が集まり、2,000人以上が一堂に会したこともあるそうです。イベントのない日には夕暮れ時から常連さんが集まって暗くなるまでのんびりと時間を過ごすなど、夏季限定の営業にもかかわらず地域のコミュニティの場としての重要な一端を担い、多様なイベントで田舎町への人流を生み出しているという運営スタイルは、奈良でいうみなクルのようでもあり応用できる工夫がたくさんありそうだなと感じました。



店内に一步足を踏み入れるとグリーンに統一されたカウンターに所狭しと並ぶ雑貨の数々、壁はレトロなポスターやレコードで埋め尽くされ、奥にはカラフルで可愛いテーブルやチェアが並ぶカフェスペースがあり、まるでミニチュアハウスのような空間に心が弾みます。天井に沿ってぐると設置された展示棚にずらりと並べられた年代物のビール瓶やコーヒー豆缶は今ではもう手に入らないような年代物ばかりなのだと思います、一気にノスタルジックな気持ちに引き込まれます。大きなジュークボックスと古いピンボールゲームのマシンは今も現役だそう。カフェスペースの家具は、テーブルも椅子もそれぞれデザインが違っておりテイストもばらばらなのに、上品にまとまっていて不思議と居心地がよかったです。アンティーク家具や手作り棚の温もりが居心地の良さを格段にアップさせており、古きよきものを大切に活かす、セカンドハンド精神にあふれた空間でした。

軽食としていただいたミートパイとシナモンロールは素朴ながらもおいしく、時間が許せばもう少しゆっくりと味わいながら、読書でもしつつのんびりと過ごしたくなる場所でした。



10月2日、ハウスヤルビ町で過ごす最後の晩に「NIKLANDIA（ニ克蘭ディア）」というフィンランドらしさ満載のロケーションにあるレストランで送別ディナーを開催していただきました。ここは視察団の佐藤さんのホストファザーが経営されているリゾート施設で、様々なタイプのサウナ付きコテージと食事のサービスのほか、季節に応じたアクティビティを提供しており、目の前にある美しい湖では夏はボートやSAP、冬にはアイススケートができるそうです。また驚くことに一部界限では「キング オブ サウナ」とも称されるSavusauna（サヴサウナ）＝スモークサウナが設置されており、なんと今回私たちのために暖めておいてくださいました！

この「スモークサウナ」はさすがのフィンランドでもどこにでもあるものではなく、サウナを暖めるまでに非常に時間と手間がかかる為、最上級のおもてなしとしての意味合いももっています。存在は知っていたものの、まさか体験する機会に恵まれるとは思ってもいなかった為、本当に思いがけないサプライズでした。スモークサウナはその名の通り、煙で燻して暖めるため、サウナ内は真っ黒い煤でおおわれて一歩踏み込んだだけで目に染みるほど。照明はなく街灯の明かりがやんわりと差し込むだけの仄暗い中、濃厚なスモークの香りにつつまれ、ロウリュで温度を上げながら汗がにじむのを待ちます。

ディナー後だったため時間は19時をまわり、外は真っ暗、気温はおそらく5度程度で水温は当然それ以下だったと思いますが、サウナで温まった体で思い切り飛び込んだ後は気分爽快でした！

飛び込む時に、日本語でいう「こんちきしょう！」といったニュアンスの合言葉があると教えていただき、叫びながら夜の湖にダイブしたのはいい思い出です。

気になる方は、こっそり「フィンランド語 悪態」と検索してみてください。

帰り際には思いがけず一人一人に記念品のお土産を頂いたうえ、メリさんが、ミカエラさんとヤーナさんから預かったという画集を渡してくださいました。Esa Ojaraさんという方の画集で、この方はハウスヤルビ町出身なのだそうです。marimekkoをはじめ様々なポスターデザインを手がけたこともある方だそうで、私が自己紹介の際、昔からmarimekkoが好きで、学生の頃は自分でも似せた絵を描いていたと話したことを覚えていてくださったのだと思います。お会いしてまだ数日しかたっていない私にここまで気持ちのこもった贈り物をしてくださるなんてと、思わず感極まってしまいました。明日にはフィンランドを発つという寂しさもあり、涙をこらえられませんでした。

かなり大きく厚みのある画集でしたが、無事に持ち帰ることができました。今回の旅を思い出しながら、ゆっくり眺めたいと思います。

おわりに

滞在中、ホテルのあるリーヒマキ市からハウスヤルビ町へ移動する車中から何度も見た景色。悠々とした農地のなかにぽつりとたたずむ赤い屋根の家が画になる美しさ。反対側は剥き出しの岩肌に岩の塊がゴロゴロと転がる緩やかな山の斜面。そのどちらも北海道とは似て非なるもので、一つ一つがアートのように美しく、見飽きることはありませんでした。

今でもハウスヤルビ町のことを頭に思い描くと、その景色が頭に浮かびます。

視察団をあたたく歓迎してくださった議長のリスト・ティッパーナさん、ずどーんTシャツでお出迎えしてくれた副議長のカティさん、
町長のベッカ・マーッタネンさんと奥様、温厚さが顔にも表れている技術担当のヨユニさん、まるでSPのようないでたちの議員のカリさん、雇用促進担当として企業視察につき添ってくださった、お菓子作りの腕前がプロ並みのヘイディさん、子育てママとして息子の話を親身になって聞いてくれたメリさん。その他、この度の交流に携わってくださったハウスヤルビ町の皆様に感謝申し上げます。

そして全日程の引率を担当してくださった教育長のヨナスさん。朝から晩まで一瞬たりとも休むことなくすべての役割を引き受けていただき、各施設においては案内係を務めてくださり、初日から帰国日の送迎まで本当に何から何までお世話になりました。

7日間それぞれ通訳をしてくださった通訳のサカリ・ヴァルカマさん、橋本朝子さん、セルボ貴子さん、ペティさんにも厚くお礼申し上げます。

議員のカリさんは最終日に空港までお見送りに来てくださり、空港内の移動中、少しの時間でしたがお話ができました。私の拙い英語とフィンランド語に辛抱強く耳を傾けてくださったおかげで最後まで楽しく交流することができ、お礼の気持ちを伝えたくてもなにも差し上げられるものがなく、日本で買って持ち歩いていたガムを一粒差し出してみると、とても気に入ってくださり「このガムのためにまた日本に行かなくちゃ」と言ってくれて嬉しかったです。さらにお返しにとスーツについていたハウスヤルビの紋章バッジをその場で外して手渡してくださいました。ガム一粒に対して、とても大切なものをいただいてしまった気持ちで、嬉しくも申し訳なくもあり、印象に残る思い出になりました。この時のお礼をするためにも、また次の機会に皆様を奈井江町でお迎えする時には、私なりに心を込めたおもてなしでお迎えさせていただきたいと思いました。

今回はお会いしたすべての方それぞれのお人柄に、癒しとぬくもりをいただいた旅でした。

往路復路共に空港での手続きも順調で、全日程予定通り進み、誰一人としてケガや体調不良に見舞われることなく終えられたことは本当に幸運だったと思います。この度の視察団員としての参加を快諾してくださった三本町長、そして国際交流担当の高橋さんには出発前から大変お世話になり、ありがとうございました。ほぼ初対面だった視察団員の皆さんも分け隔てなく接してくださり、普段は接点のない学生さん達とも交流を持てたことをうれしく思います。皆さんのおかげで安心して楽しく9日間を終えることができました。改めて、この度はありがとうございました。

家事育児を全面的にサポートしてくれた夫と、お義父さんお義母さんにも感謝です。

レポートは以上になります。ありがとうございました。



報告書

奈井江商業高校 3年生 豊嶋 大樹

【1日目】

役場での出発式では、多くの方々に見送りされた。送迎時の車では、去年のハウスヤルビ視察団のお話を聞いた。少しだけフィンランドについて聞くことができて良かった。東京に着いたらお食事をした。そこで食べたハヤシライスが日本を離れる前の最後のお食事となった。その後ホテルにバスで向かった。1日目は移動の1日だった。ゆっくり休んだ。

【2日目】

集合時間が 5:15 と早い時間だった。羽田空港は広く、内装が江戸時代のようなもので日本を感じられた。出国は予想よりもあっさりと終わった。半日以上も飛行機に乗ると思うと悲しい気持ちでいっぱいだった。機内食は和食と洋食で選ぶことができ、鶏肉が食べたかったため洋食にした。あんまり食べたことのない味付けだった。頑張って眠るようにして途中、到着までの時間を確認すると到着まで 7 時間だと気づいて絶望した。やっとの思いでフィンランドに着き、町の人に迎えられ車に乗った。助手席に乗るときにいつも通り左側を開けようとするところにはハンドルがあった。すっかり忘れてしまっていた。この日は雨だったため滑りやすく、事故現場もあった。歓迎会ではそれぞれのホストファミリーにあった優しい家族でほっとした。母は、ピーアさん。父はドルウスティさん。長男はマティアス。次男はドピアスの 4 人家族だった。この歓迎会では、始めに各町から挨拶をし、お食事をした。この歓迎会で初めてビートルートを食べた。少し火が通っていない芋みたいだった。フィンランドの飲み物の単位が基本リットルだった。日本の 500ml は 0.5 L と書かれている。またペットボトルのキャップがボトルにくっついていて、環境に配慮されていた。加えて、リサイクルをしたら 0.20 セントもらうことができる。EU では 2025 までに全て変わり、そうしないと法律違反になるそうだ。家に行かせてもらおうと、優しく丁寧に案内された。どこを見渡しても日本とは全く違っていた。疲れたのですぐに寝た。

【3日目】

朝起きたらどこにいるのかわからなかった。夢はもちろん日本語で見るため、外国にいることを忘れていた。朝起きたら、朝食を食べた。ライブレッドとシナモンロール、サルミアッキと伝統的なチョコレートを食べた。ライブレッドはライ麦で作られたパンで、とても硬くて少し変わった味だった。基本は、バターやチーズ、レタスを合わせて食べるそうだ。サルミアッキは本当に美味しくなかった。変わったチョコレートは独特な風味があるけれどとても美味しかった。朝食後は、足のマッサージ機を試してみた。膨らんで面白かった。そのあとは家にあるジムに行った。ベンチプレス台、ランニングマシーンなど、何でも揃って

いてすごいなと思った。懸垂対決やリフティング対決、ミニフリースロー対決をした。そして、外に出てフリスビーとバレーボールで遊んだ。どれも楽しかった。次にスーパーマーケットに行った。そのスーパーマーケットは日本でいうイオンだった。そこでは、服やお菓子を買ひ、お食事をした。そこでは飲み物が無料だった。フィンランドの方々はなぜかゼロシュガーを好みフレッシュなものが好きで、マティアスはペプシのゼロシュガーを飲んでいて、マティアスは大きなカップがいっぱいになるまで注いでいた。ポテトにかけるケチャップの量も自分じゃ考えられない量だった。その後、スクーターで遊園地に行った。スクーターで移動するのが楽しかった。日本でも乗りたいなと思った。遊園地では新しいローラーコースターにのった。他にも回転する乗り物に乗った。酔って気持ち悪くなった。もうこんなことはしたくないと思った。その後もお化け屋敷や観覧車に乗った。辺りは暗くなり始めた。その後も、夜の観覧車やローラーコースターなどに乗った。帰りもスクーターを使い、爽快な気分になった。電車では眠そうになってフラフラしていたので、驚かれた。周りの人は全員起きていて文化の違いを感じた。車の中でもすごく眠たくて、話しかけられても、毎回聞き直してしまった。家に着き少し話した後、寝る準備をして寝た。

【4日目】

昨日疲れていたこともあって、ぐっすりと寝ることができた。朝はライブレッドを食べて、マティアスと少しビデオゲームをしました。その後、ローカルストアに出かけて、サウナに向けて飲み物を買いました。家に帰り、昼ごはんを食べました。じゃがいもとさつまいものフライとジューシーなチキンで美味しかった。最後、デザートでチーズが出てきて、少し変わったチーズだった。自分には合わなかった。昼食のときには日本についてたくさん話した。軍隊であったり高校だったり日本語について話した。フィンランドは高校を卒業すると少しして軍隊に行く義務があるそうだ。日本語について話しているうちに、日本語は非常に難しい言語だと改めて感じた。昼食後はサウナパーティーだった。奈井江町の方々と、フィンランドの町の方、各ホストファミリーの方々と、4種類のゲーム(モルック、シート広げ、積み木、バケツリレー)をした。その後、サウナに向かった。サウナでは、地元の人が石に大量の水をかけて一度だけ、灼熱になった。湖はとても冷たくて、天気の良いこともあって綺麗だった。フィンランドの人は迷いなく飛び込んでいて楽しそうだった。お食事会では、それぞれのホストファミリーや学校について話した。次の日は、ハウスヤルビの学校ということもあり少し早めに食事会を出た。帰って寝る準備をし、すぐに寝た。



【5日目】

ハウスヤルビの学校に行く日だった。朝はいつも通りライブレッドとシナモンロール、い

ちごの飲むヨーグルトのようなものを食べた。美味しく感じてきた。そしてすぐに、ハウスヤルビの人(ヨナスさん)がきて学校に向かった。付き添ってくれる人は去年奈井江に來た人(ユストゥス)だった。奈井江で撮影した写真を見せてくれた。授業はもちろん全てフィンランド語でなにもわからず、とても孤独を感じた。1時間目は地理、2時間目はスウェーデン語、その後2時間暇になったのでハウスヤルビのオイッティ周辺を歩いた。運動場やミュージカル施設なども行った。時間が余り、まると同じクラスに入って少し授業を観察した。その後給食で、パスタを食べた。自分の好みの味だった。3時間目は宗教。4時間目は数学でした。休み時間では、同じ学年の人がよく話しかけてくれて楽しかった。ここでユ



ストゥスとはお別れし、もう1時間就職についての授業を受けた。その後奈井江町の方々と合流しハウスヤルビの保育園と図書館へ行った。日本の保育園と図書館とは全く違っていた。どれもユニークな設計だった。図書館は、太陽の光をモチーフにされていて、日本じゃ考えられない配置のされ方をされていた。家に帰ったらピザを食べた。ジューシーかつスパイシーで美味しかった。そして少ししたら林へ行った。いろんな種類のきのこが生えていた。進んでいくと、辺り一面は緑に囲まれ、大きな石も多くあった。そこにはタイムカプセルがあり、マティアスと自分の名を刻んだ。

景色も空気も良く気持ちよかった。そこには空気が良くなければ生えない植物すらも生えていた。家に帰るとホットタブという湯船に浸かった。飲み物と一緒に1時間以上楽しんだ。その後晩御飯にもう一度ピザを食べて、寝る準備をして寝た。

【6日目】

朝起きて朝食を食べた後、マティアスを起こしに行った。少ししてリヒマキの高校に行った。1時間目はエコノミーだった。途中授業が止まって、給食を食べた。食堂の混雑を防ぐために分散しているようだ。給食はじゃがいもとサラダ、魚だった。その後急いでコンビニへ行ってグミを買った。次の時間は英語の授業だった。コンピュータを使って穴埋めするものだった。リスニングの時間もクイズ形式になっていて楽しそうだった。次はまたエコノミーだった。家に帰ったらチキンとパスタでお腹を満たし、マティアスとロッククライミングへ行った。初めてのロッククライミングだったけれど楽しく遊ぶことができた。帰りにKマートへ行った。地元のスーパーのようなお店だった。少しするとマティアスの親友がきてまたKマートへ行った。その後家に帰り、寝る準備をして寝た。



【7日目】

よく寝ることができた。準備したあとすぐに学校へと向かった。1時間目はエコノミーで、終わったらすぐに給食を食べた。今回はジャガイモをスライスしたものだった。自分の好みでおいしく食べることができた。牛乳を試しに飲んでみたらほぼ水で、変な感覚だった。次の時間は、パドルというミニテニスのようなスポーツをした。マイナス気温ということもあり寒かった。その後学校に戻り数学を受けた。コンピュータでやっていたため、メモすることが難しく少しやりにくそうだった。ハウスヤルビの学校の人やりにくいと不満を言っていたのもよくわかった。最後の授業は英語だった。30分ほど受けたあと、ハウスヤルビにロバート先生とユストゥスと向かった。はじめに、木の工場に行った。かなり古い工場で、道具も古く大切にされているそう。また全て木で作ることに重きを置いていた。お土産として木で作られたフクロウをもらえた。次はハウスヤルビで古い歴史あるお店に行った。日本でいう昭和時代のものがあつた。どれも何か懐かしさを感じるようなデザインだった。ここでは、フィンランドの伝統的な食事をいただいた。苦手なものもあれば美味しいものもあつた。お腹がいっぱいになるまで食べたあと、川に行った。迫力があり、魚さえも見えた。ロバート先生がふざけて、「飛び降りたらいくらくれる？」とジョークを言っていた。生徒と先生の関係性が感じ取れる会話だった。その後、お肉屋さんに行き、チキンウィングを食べた。ポテトが少し変わった食感で美味しかった。ムーミンのいちごジュースも飲んだ。ユストゥスのおすすめのものだった。ここでは日本の文化や考え方、学校についてたくさん話した。その後、ハウスヤルビ教会へと向かった。教会の中ではミュージカルもするらしく、実際にユストゥスがドラムをやったこともあり、一回あたり1万円を稼げるそうだ。その後ホームステイ先に送ってもらい、ロバート先生とユストゥスとの最後の別れを告げた。ハウスヤルビをよく知ることができた楽しい一日だった。



【8・9日目】

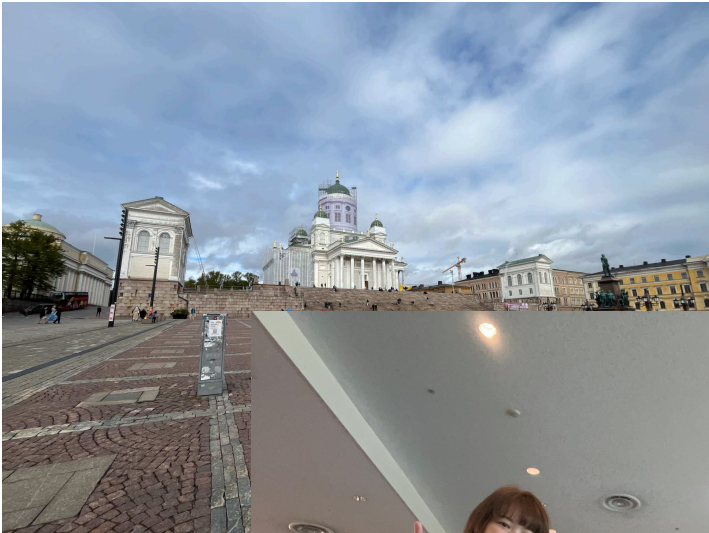
朝はいつもより目覚めがよかった。最後の朝食はお気に入りのシナモンロールを食べた。このシナモンロールがおいしいと言うと一袋ごともらった。嬉しかった。他にもチョコレートもらった。そしてホストファミリーと別れを告げ高校に向かった。高校に着いたらすぐお迎えがきて、ハウスヤルビ町からのお土産をもらった。そしてヘルシンキの方に向かった。ヘルシンキに着いたら在フィンランド日本国大使館へ行った。そこではこの旅行について感じたことなどを話し合った。それぞれの旅行についてのお話を聞き、改めて良い経験をさせていただけたと感じた。また、フィンランドの抱える問題と日本、奈井江が抱える問題がとても似ていた。相手の政策を取り入れようにも自国のルールに従わないといけないため、本当に難しい問題なのだなと気づいた。その後、ヘルシンキのショッピングモールへ行き、北海道寿司という日本料理店に行った。少しお米がもちもちしすぎている。どれも美味しく

食べることができた。昼食後は少し自由時間があり、周りのお店を見た。それから空港に行きハウスヤルビの方々とお別れを告げた。ゲートを抜け少しフィンランドのお店を見た。ムーミンショップやフィンランドのグッズが売られていた。中には PS5 を販売しているお店もあり、ここで買う人いるのかなと不思議に思った。空港の中のコンビニで残りのユーロを頑張って使おうと試みた。その後 13 時間のフライトが始まった。フライトは思っていたよりすぐに感じた。いつもより寝ることができた。日本についてまた新千歳行きの飛行機に乗った。13 時間と比べるとはるかに短い時間だったこともあり、いつの間にか北海道に到着していた。空港に到着すると、今回の視察を担当していた方々が迎えに来て少しお話をし、解散した。車の中では、それぞれフィンランドで感じたことについて職員さんと話した。英語で会話することは自分にとって楽しいことであったが、やはり母国語ほどの安心感はないと感じた。車の中でお話をしている中で、何か心の中で安心したような気持ちがあった。そのまま、家まで送ってもらい奈井江の職員さんとも解散した。

【最後に】

奈井江町ハウスヤルビ町視察団の一員として、フィンランドのハウスヤルビに行く機会を与えてくれた奈井江町の皆さんに感謝したいです。この 9 日間はただの旅行ではなく、よりハウスヤルビについて知ることのできるプログラムであり、多くの気づきを得ることができました。このような経験をすることができたのは、奈井江町の方々やハウスヤルビ町の方々、ホストファミリーの方々だけでなく、高校の先生方や両親のおかげです。この貴重な体験をこれからの生活や自分の目指す将来に活かしていきたいです。

フィンランド視察団 報告 2024



奈井江町立奈井江中学校 3年 佐藤柑奈

はじめに

今回の旅を報告するにあたり、私の大まかな旅の流れを説明します。

1日目

- ・ 奈井江町→新千歳空港→東京で1泊

2日目

- ・ 東京(羽田空港)→フィンランド(ヘルシンキ) 機内泊

3日目

- ・ フィンランド(ヘルシンキ)に到着
- ・ ホストファミリーと合流後、食事会(この日からホストファミリーの家に宿泊)

4日目～5日目

- ・ ホストファミリーとフィンランド観光

6日目～8日目

- ・ ハウルヤルビ内の学校を見学

9日目

- ・ ホストファミリーと別れた後、フィンランド大使館を訪問
- ・ フィンランド(ヘルシンキ)→東京(羽田空港) フライト
- ・ 東京(羽田空港)→新千歳空港→奈井江町役場で解散

ざっくりとこんな感じです。このレポートでは日にちごとに分けて旅を説明していきます。中身がギュッと詰まった旅になったので、終始分かりづらいこともあるかもしれませんが、ご了承ください。

1日目

奈井江町役場を出発した私達は車で新千歳空港に向かい、そこから飛行機で東京の羽田空港に到着。その後、空港の近くのホテルで1泊しました。

預け荷物検査に少し緊張していましたが、無事通過することが出来ました。基準が20kgで、私の荷物が19kgだったのでギリギリでした。出発1時間前に必死で調整した甲斐がありました。

飛行機を降りて合流し、一安心。かと思いきや、ここで早速トラブルが発生しました。なんと私は、スマホの充電器を家に忘れてしまったのです。それに気づいたのは飛行機を降りてからでした。ACアダプタを同じく視察団の豊島先輩からお借りし、コードを空港内の売店で買うことができたので何とか乗り切れましたが、LINEで母にとんでもなく叱られてしまいました。

2日目・3日目

ホテルを後にした私たちは、ついにヘルシンキ行きの飛行機に乗り込みました。私は経験したことの無い13時間ものフライトに胸を躍らせていました。この後地獄を味わうことになるとは知らず...

飛行機に乗り、2時間ぐらいで機内食が出ました。鶏肉の入ったペネがメインディッシュで、とても美味しかったです。3時間目ぐらいで飛行機にも飽きてきて、もう寝てしまおうと思いました。ところが、傾かないシートや狭いスペースのせいか全く眠れません。行きのフライトで1番キツかったのがこれです。何とか寝てもすぐ起きてしまい、結局寝られたのは2時間ぐらいでした。映画が好きなわけでもなかったのに、余計辛かったです。到着2時間前ぐらいに、2回目の機内食が出ました。2回目は無印良品のキーマカレーが出ました。とても美味しかったです。フィンランドに着くまでに少しでも日本を感じられて良かったです。まあ無印のカレー初めて食べたんですけどね。

現地時間15時、私たちはついにフィンランドに足を踏み入れました。時差で6時間遅くなるので、まだ15時なのが少し辛かったです。現地のホテルまで強面でお茶目な人に運転してもらい、ホストファミリーと初めて対面しました。その時来ていたのは、ハウスヤルビ在住のホストファザーのヤルッコと長男のヘンリでした。早速言葉が通じず、言葉の壁を感じると共に「お先真っ暗かよ...」と旅に同行したことを後悔しました。その後の食事会でも何も話せず、車の中でも言葉が通じなくて、不安はますます大きくなるばかりでした。ホストファミリーの家について家族の紹介を受けました。家族は先程のヤルッコとヘンリ、長女で私と同年のカトリー、末っ子の女の子シーリー、ホストマザーのダミアの5人で構成されています。チョコレートとサルミアッキをご馳走になりました。チョコレートは美味しかったです。私はその後お土産の珍味とグミを渡しました。珍味に関連して日本酒のことや熱燗のことを話しました。するとビールを温めようとして焦りました。カトリーは何も話さないし、冷たい目をしていたような...。その日はなかなか寝つけませんでした。(後日、ダミアとカトリー以外は英語が通じないことが発覚しました。)

4日目

起きてから、フィンランドの家庭的な朝食を食べました。フィンランドでは毎日同じようなものを食べていて、基本的にはパン、ハム、きゅうり、チーズ、バターが定番です。パンには普通の丸いパンとライ麦パン(凶器になる硬さ)、カレリアンピーラッカ(薄い生地にリゾットのようなものに乗っている)があり、どんな時でもバターを塗ります。また、食事の時には必ず飲み物を飲まなければならないようです。



それから、今回の旅に同行した長屋さんのホストファミリーと一緒に、ヘルシンキ市内を観光しました。(私のホストファミリーは別行動でした。)新しく出来た図書館から歴史的な建物まで、様々なところに連れて行ってもらいました。図書館の中はまるっきり日本と違います。なんせ、飲食OKでカフェまであって、静かにしなくて良いどころか遊べる遊具やボードゲームまであります。かと思えば別の場所では会議をしていたりもします。別の階にはミシンや3Dプリンター、ラボだってあります。図書館とはなんでしょうか。でもこれなら、本に気軽に親しみを持ってくれたり図書館に行きやすくなりそうで、私はとても好きでした。話が変わりますが、衝撃的だったのが駅のトイレが有料だったこと。なんと3ユーロ(約500円)も払わなければ行けません。フィンランド人って意外とがめついのかも...?(そんなことないです。)

帰ってきてから、カトリーたちのいここにあたるギーリーとコテージでホットプール・歓迎パーティを開いてくれました。とても寒い日だったので、ホットプールが体にしみしました。食事はヤルッコの作ったピザでした。パインが乗っていてとても美味しかったです。みんなでボードゲームもしました。それをきっかけに、カトリーたちとも少し打ち解けることが出来ました。(ここら辺からカトリーが人見知りであることに気づき始めます。)

5日目

昨日と同じ朝食だと思ったら、少しメニューが違いました。昨日と同じものに加えて、オートミールのリゾット〜ベリーソースを添えて〜が出ました。朝はあまり食べられない方なので体験出来ませんでした(嘘です。食わず嫌いしました。ごめんなさい。)が、フィンランドではごく一般的だそうです。

その後、近くのリーヒマキ市の山道を2km歩きました。フィンランド人は健康のためによく運動すると聞いていましたが、本当だったようです。2kmは意外と短く、景色を眺めていたらあっという間に戻って来ていました。家に帰ってから、買っているうさぎのムーとニップソを触らせてもらいました。名前はムーミンのキャラクターが由来で、思っていた5倍ぐらい大きかったです。毛並みはツルツルしていて、とても可愛かったです。お昼を食べた後、友達とビデオ通話をしました。外の風景を移しあって写真撮ったのですが...こっちは真昼間なのにあっちは暗闇で気持ち悪い...。そんなことをしていると、ヘンリが「おやつだよ」と呼びに来てくれました。おやつのパンケーキも日本とは違って、鉄板に生地を流し込んでオープンで焼くタイプでした。アイスやいちごのシロップ漬けを乗せたりして食べます。しっとりして美味しかったです。



その後は視察団のみんなと合流して、サウナパーティーをしました。最初にしたモルックなどの縦割りチームで行うゲームは楽しかったです。大人の人は意外とフレンドリーでした。そしてついに本場のサウナに...!と思ったのですが、私一人だけガチ競泳の水着を着ていて、少し恥ずかしかったです。サウナ自体の温度はこっちの浦臼温泉より低かったかも...?でも湖はすごく冷たい!!!!!!何セットか繰り返して、体もあったまったところでお待ちかねの夕食です。私のホストファザー、ヤルッコが腕を振るいました。どれも美味しかったです!楽しい一日になりました。(この日からGoogle翻訳を乱用し始めます。)

6日目

6日目からはいよいよ学校!と言えど、授業は全てフィンランド語なので分かるはずもなく、初っ端からキノコについて調べて発表しろと言われかけたのでドキドキしていました。色々驚いたことはありましたが特に印象深かったのは、「授業開始・終了の挨拶がなく、前後の10分ぐらいをいつも無駄にしている」「1授業終わる事に外に出される(ものすごく寒い)」「3時間目の途中をお昼休憩とし、給食が食べられる校舎に向かう」事ですかね...。日本とも奈井江町とも何もかも違って、少し緊張しました。(ここでやっとカトリーが人見知りだと確信する)

学校が終わってからはカトリーとその友達ベラが通うジムに行き、トレーニングを見学させていただきました。ベラは少し華奢な印象を受けましたが、カトリーは色々たくましいような...。その後スーパーに行って、軽食を食べました。クロワッサンのハムチーズトースト?はとても美味しかったです。

夕食後にみんなでシナモンロールを作りました。ヤルッコは私に「上手!びっくりした!」と言っていました。ちょっと下手くそだったけど、まあまあいい感じかと思います。カトリーも挑戦しました。「私：確かダミアは料理下手だった気がするけど、カトリーはどうだろう...」...どうやらお母さんの血をしっかりと受け継いでいたようです。ちょっと苦笑いしているカトリーに、ヤルッコがニヤニヤしていました。部屋の片付けをしていると、ヘンリがサンタクロースのチョコレートを持ってきてくれました。モジモジしていたので翻訳アプリを差し出すと、「あなたへのプレゼントです。」と言っていました。私が「ありがとう。私はチョコレートが大好きです。」と返すと、「僕も大好き」と照れくさそうに返してくれました。チョコを美味しく食べたのですが、後からお願いごとをしてから食べるものだを知り、私が目を丸くしていると、ダミアが笑っていました。



7日目

この日の学校では室内アイスホッケーをしました。なんせ床が滑って何回転びかけたことか!カトリーが危なっかしそうな目でこちらを見ていました。給食はスープとパンなどでしたが、食べている途中に



突然隣の席にスライスチーズが飛んできました。前の席で遊んでいた生徒たちの仕業でした。私が「flying cheese...」とつぶやくと、カトリーが少し笑いました。

そしてこの日は夕食にデザートが出ました。りんごとオートミールをシナモンで炒めたものに、バニラソース(緩くて薄めのカスタードクリーム)をかけ、アイスに乗せて食べました。

それと一緒に、ヤルッコ特製の家に生えてる山ぶどうジュースも頂きました。どちらも甘くて美味しかったです。

その後、リーヒマキの大きなスーパーでお土産を買いに行き、帰りに市内を案内してくれました。実は円安に備えて多めにユーロを持っていたのですが、あまりに多くてヤルッコも苦笑いしていました。(約35000円分)お菓子の量り売りもしました。ちょっととりすぎた気もしたけど…。市内観光では、大きな教会を見せてくれました。なかなかの迫力でした…。

帰ってからキッチンで雑談していると、ヤルッコが「またぶどうジュース飲みたいよね?(圧)」と翻訳画面を見せてきたので、「...Yeah」と返しました。すると、一緒にいちごヨーグルトもだしてくれました。私が「日本帰ったら絶対5キロ増えてるよ...」と言うと、「そんなことはないよ」ヤルッコは言いましたが、「日本は夕食の後に何か食べるのはあんまりない事なんですよ」と言う、「...きっと大丈夫だよ」と気を使われました。ちなみにですが、この日からやっとリビングでくつろげるようになりました。カトリーとテレビを見ていました。

8日目

この日の学校は特に変わったこともなかったと思います。あったとすれば、給食のリゾットがほぼソースだったことくらいでしょうか。(米の密度がすごく少ない)

家に帰ったら、ダミアがパックコーヒーの入れ方を教えて欲しいと私に言いました。フィンランドにはないそうです。入れ終わって1口飲むと、「日本のコーヒーは美味しいのね。」と言っていました。私はインスタントラーメンを食べました。辛くするオイルがあったのですが、私はそれを香味油だと勘違いし、全部かけてしまいました。結果はお察しの通りです。私が思わず「辛っ!？」と叫ぶと、ダミアとカトリーが苦笑いしていました。その後、カトリーの好きな冷凍のミートパイもひとつ食べました。

午後3時ぐらいから、歴史の先生ロバート、奈井江町に来たばかりのユーストゥス、アダプタをお借りした豊島先輩と、フィンランドの歴史ある場所を巡りました。最初に訪れたのは木工工房。内部を見学して、木のフクロウを貰って帰りました。(長屋さんにも一番大きいものを持って帰りました。)次に訪れたのは歴史あるダイナーカフェ。ここでは内部の見学後、フィンランドの一般的なおやつを食べました。シナモンロール、グミ、ライ麦ペースト(これは好みが出るそうです。美味しかった!)などと一緒に、ジュースやお茶を楽しみました。その後、夕食を食べに行きました。ケバブを食べましたが、結構ガッツリで量も多かったです。歴史は嫌いだけど、とても楽しかったです。

家に帰ると、ダミアが泣いていました。何事か!?と思いましたが、どうやら明日の朝は仕事で早く出ないといけないので、私と会えるのは今日が最後だそう。手紙をいただき、お別れのハグをしました。ヤルッコが「最後の別れに料理を作ったんだ。柑奈の分もあるんだけど...。」私はもちろん「食べたい!」と答えました。(次の日移動中の車内で豊島先輩にドン引かれました)最後の晚餐(?)は今まででいちばん美味しかったです!メレンゲのケーキと山ぶどうジュース、お菓子も出してくれて感激していました。



ふと前を見ると、そっぽ向いているヘンリが泣いていました。どうやら彼も涙脆いようです。私はみんなに感謝を伝え、ヘンリに「サンタクロースにあなたの健康を祈ります。」と伝えました。すると、あまりにこらえきれなかったのか自室に駆け込んでいきました。少し帰りたくない気もしましたが、きっと気のせいだろうと、最後の荷物確認に取り掛かりました。

9日目・10日目

最後の朝食は案外いつもと同じかなと思っていると、ヤルッコがチョコレートムースを出してくれました。コンビニスイーツのようでとても美味しかったです。気のせいかヘンリの姿が見えないような...

ついに別れの時が来ました。ここでまたしてもハプニング発生。ヘンリが寂しくて学校に行きたくないと言きだしてしまいました。私はヘンリに部屋のチェックを頼みました。学校から帰ったらお願いしたいと念をおして伝えました。実はお土産を買う時、こっそりお礼の品としてサンタクロースのいちばん大きいチョコレートを買っておいたのです。ルーズリーフにメッセージを残し、借りていた部屋に置いてきました。時間が無くなってしまい、最後に階段での集合写真やヘンリとのツーショットをとり、私はホストファミリーと別れました。あの後ヘンリは学校へ行ったのでしょうか...

別れたあとは視察団のみんなと合流して、フィンランド大使館を訪問しました。携帯の持ち込みが禁止で、手荷物検査をしなければいけないなど、独特の雰囲気緊張しました。フィンランドの印象を聞かれ、たどたどしく活発的な印象を受けたと答えました。ガチガチだったとは思いますが、お茶はきちんと喉を通りました。

さあ、全ての予定が終わり、空港に着きました。地獄の13時間フライトの再来です。絶えず襲う「暇」と「疲労」に打ち勝つことは出来るのか...。今回の機内食も2回で、1回目はあんかけご飯が出ました。副菜でそばが出たので驚きました。2回目はポーチドエッグで、これが今回の旅で何より苦痛だったことです。サルミアッキにも優ります。機内食が配られ、乗客たちが蓋を開けた瞬間機内に卵の匂いが広

がりました。卵が苦手な私にとっては地獄そのものの。トイレに逃げ込みましたが、トイレもまたきついフレグランスの匂いが…。結局枕をガスマスクにして乗り切りました。

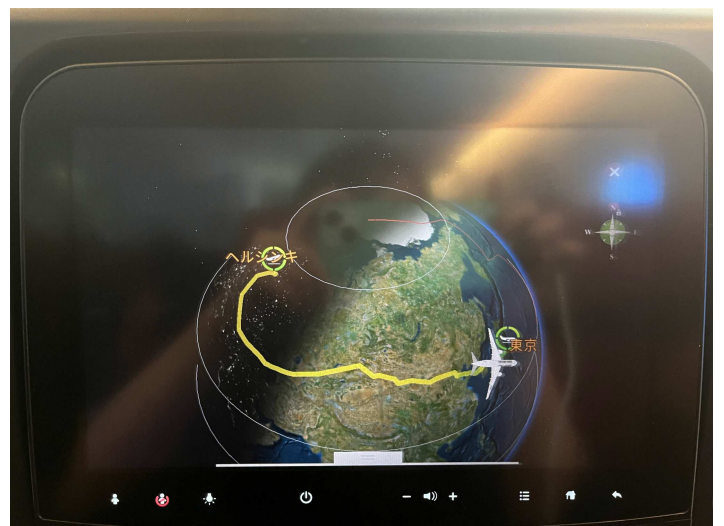
日本に帰り、一安心かと思って外に出ると

「暑っ!？」東京は北海道の数倍蒸し暑く、冬用の衣服を来た私にとっては結構辛かったです。その後すぐ飛行機に乗り、2時間爆睡して無事新千歳に到着。私たちはそこで解散しました。



旅を終えて

私は今回の旅が初めての海外渡航になりました。私自身、心配事や不安はたくさんありましたが頼りになる大人の皆さんや先輩、見慣れた友達と行くことが出来て少し安心して旅を楽しめたと思います。ホストファミリーの皆さんが優しく親切な人たちであったことも、本当に良かったです。私は今回の旅で、多角的に物事を見る力が養われたのかなと思います。例えば、4日目の欄で紹介した図書館。フィンランドの図書館は日本とまるっきり違います。フィンランドの図書館は日本よりも親しみやすく、ある意味「日本の堅苦しさ」が出ている場所なのかもしれません。ですが、それはあくまで「親しみやすいかどうか」が重視される点である時のことで、「ものを大切にする」ことが重視される点では、日本はフィンランドよりも優れていると言えます。単純に考えて、走り回っていい場所にもものを保管するよりも、設備の整ったルールのある部屋で保管した方が圧倒的にもものは壊れにくく、盗まれることも少ないでしょう。ですがどちらも、「本を読んでもらうため」にしていることであり、方法は違えど目的は同じです。このように、色々な点から見れば物事の良い点・悪い点、共通点・相違点が分かる力が少し見に着いたのかなと思います。改めて今回の旅に行ってよかったと思います。奈井江町役場の方々を始め、今回の旅で支えてくれた皆さんにこの場を借りて感謝申し上げます。本当にありがとうございました。以上を報告とさせていただきます。



ハウスヤルビ町を訪問して

奈井江中学校 3 年 長屋まる

〇1 日目

学校で給食を食べる前に早退しましたが、この日の給食が私の大好きなレモンタルトだったので学校を離れたくありませんでした。食べれないのか、と落ち込んでいたらなんと先生がタルトを持ってきました！！🍋おかげでもっと頑張てこよう、と思えました。私の不安は、全くなくて役場で出発式をして見送られてる時もずっとこれから起こることにワクワクしてました。千歳から東京までは一瞬でした。東京について飛行機から降りた瞬間、むわっとした重い空気を感しました。とても蒸し暑かったです。夕食はオムハヤシライスとクリームブリュレを食べました😊ホテルを1人で泊まるのは初めてでした。次の日は4時起きなのに蒸し暑すぎでなかなか眠れなかったです。



ホストファミリー：Hanna Leena Luostarinen

〇2 日目

朝早く起き、空港に移動して国際線に行って荷物検査を済ませました。国際線に行くのは初めてで、国内線よりも断然広く、日本らしいものを全て揃えたような空間で日本人でも楽しめました。そしていよいよフィンランド行きの飛行機！！飛行機では映画を3本見ました。が！13時間という長丁場。そう簡単には着きません。私は寝たいのに座る体勢しかないのがほんとに苦痛でした。寝て起きてもまだ後6時間、心が折れそうでした。機内食は3、4食出ましたが、量が多すぎたので副菜を柑奈にお裾分けしました。どれも美味しかったですが間食のさつまいも塩パンが最高でした。そして、やっとフィンランドに着いた時は柑奈と2人で喜びました。その後、車でホテルに移動し歓迎会をしてくださいました。私はここで初めてホストマザーのハンナとシスターのアンネに会いました。最初は、ものすごくドキドキしてなかなか話せなかったけど歓迎会の帰りにスーツケースを持ってくれたり、ハンナとアンネが沢山話しかけてくれました。優しい人によかった、と私の緊張は解れました。そして、家に着くとホストファザーのヨーヨが出迎えてくれて家を案内してくれました。広すぎてびっくりしました。（この時は夜でしたが、明るい時に家の周辺を見たら自然の緑が広がってて良い景色でした。）時差もあり沢山の人と会って疲れたのでゆっくり寝れました。

03 日目

朝起きたらホストブラザーのエミリー以外は揃っていました。聞いたところ、エミリーは朝が苦手らしいです。朝ごはんは、トーストとヨーグルト、紅茶も飲みました。ハンナとヨーヨが作ったジャムで食べました。最高に美味しかったです。フィンランドにいる間の朝食はずっとこのセットでした。美味しかったので全然飽きなかったです。この日は、私のホストファミリーと柑奈でヘルシンキに観光に行きました。電車でヘルシンキまで行きました。電車も日本と違うところが結構あって、自転車やスクーターを乗せたり、日本では私語は慎んだほうがいいですが、初めて会った人とかと普通に話して笑い合ってた温かい雰囲気でした。ヘルシンキの景観は歴史的でした。前後の凹凸がなくて建物の高さも揃ってました。街中は、車や自転車よりも路面電車やスクーターが沢山走ってました。私たちはまず大きな図書館



『Oodi（オーディ）』に行きました。図書館といってもカフェ、映画館、ゲーム、ミシンを借りれる、ミーティングスペース、バンドを練習する部屋などいろんな設備があってびっくりしました。図書館といえば私語、飲食禁止ですがここでは全然OKです。世界一の公共図書館と呼ばれるだけのものはありました。その後私たちは昼食を食べました。私たちが行ったお店はお店の人が自分で取ってきたいろんな肉を調理して出す、という珍しいお店でした。私は鹿肉のハンバーガーを食べました。とてもボリュームで満腹でした🦌食べた後はヘルシンキを散歩して観光したり、観覧車に乗って海を見ました。一日観光して、フィンランドはとても素敵な所だなと実感できました。

04 日目

この日はエミリーのアイスホッケーの試合を見に行きました。試合が始まるまではハンナとヨーヨと、ヤルヴェンパーで観光しました。そこでキャラメルケーキを食べたけど、ものすごい甘さでした。そして試合が始まりました。日本ではなかなか見れないのでワクワクしました。初めは、ルールもわからなかったけどホストファミリーが教えてくれました。選手同士がぶつかり合ったり、壁にぶつかったりと大迫力でした。スケートしながらパックを追いかけてたり途中で仲間と交代したりと難しそうな試合でした。結果は勝ちました！試合が終わって家に帰ってすぐサウナパーティーに行きました。サウナに入る前にグループに分かれてゲームをしました。1つ目はフィンランドで有名なモルックをしました。私は以前奈井江で開かれたモルック大会に出場したので自信がありましたが合計3本しか倒せなくてショックでした😓2つ目はレジャーシートを何分で広げられるか、3つ目は薪を運んで一定の高さまで何分で積めるか、最後は湖から水をすくって



リレー形式で運びました。全部チームで協力して準優勝できました!!人生初本場のサウナは最高の気分になりました。サウナで熱々になった体を湖で一気に冷やすのが面白かったです。夕食もとても美味しかったです。盛りだくさんな1日になりました。



〇5 日目

今日は、学校に行く日でした。バスで学校まで行きましたが、バスを待ってる時もバスに乗って席を探してる時も視線が私に集まってました。心臓がバクバクでした。エミリーは、友達と話してるので私は学校についても何をしたらいいかわからなくてひとりぼっちでした。1時間目の数学が終わると2人の女の子が話しかけてくれました。彼女たちはヘルミとカッターリーナという名前です。2人が、休み時間は一回学校を出て外で待機することを教えてくれました。外に行くと彼女たちと仲のいいグループの女子が五人いて、私のことを紹介してくれました。2時間目も数学だったので教室は一緒でしたが基本授業が変わるごとに教室を移動しました。そして校舎が3つ以上あってとても広かったです。3時間目が終わるとみんなで給食を食べに行きました。日本では、自分たちの教室で食べますがフィンランドでは給食を食べる専用の校舎があって学年間わず好きな人と自由に座ってました。私は、日本の給食が好きなのでフィンランドの給食も楽しみにしていました。この日はマカロニみたいなやつとクラッカーとキャベツでした。とても美味しかったけど日本の給食に比べたら少なく感じました（自分で盛るバイキング制だからおかわりは自由）放課後は、ハンナと家の裏の山に登ってベリーを摘みました。普段は、キノコも沢山なってるけど今年は少ないと聞きました。その後にリーヒマキのショッピングモールに行って買い物をしてきました。フィンランドのお菓子を沢山買いました。スーパーの中に服が売ってたり、雑貨が揃っててとても広かったです。

〇6 日目

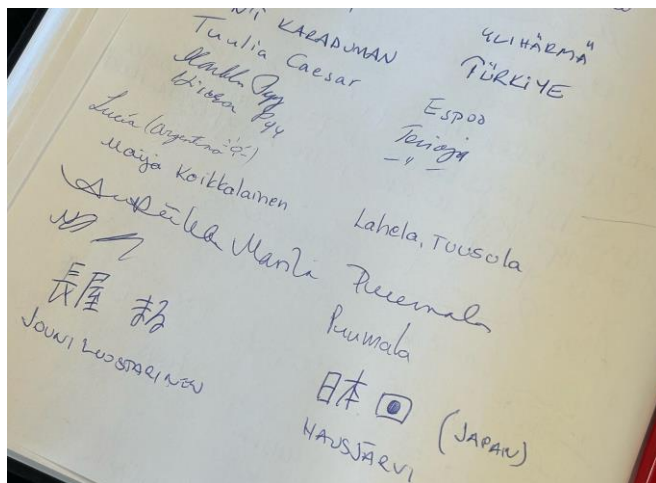
今日も学校に行きました。相変わらず寒かったです。給食を食べ終わって4、5時間目は、選択授業で私は音楽を選びました。教室の壁にギターやウクレレが沢山かかってて楽器も沢山ありました。授業が始まると先生が、生徒たちとギターやドラム、ピアノを演奏してそれにあわせてマイクを使って歌いました。他の授業はあまり理解できなくてぼーっとしてるが多かったけど音楽は楽しんで受けることができました。放課後は疲れたので家でダラダラして過ごしました。この日の夜ご飯は、両親が作ったマッシュドポテトと肉団子を食べました。美味しくていっぱい食べました。そして、夜は家のサウナに入りました。70°くらいでまだまだ大丈夫そうだったのでいっぱい水をかけて温度を上げました。リラックスできてよかったです。

07 日目

今日は、いつもより早い8時に学校が始まるから7時半に家を出なくちゃいけなくて朝が早かったです。(いつもは9時)そして7時間授業で長くて、普段は日本の学校よりずっと早く終わるのに長い時は日本より長いんだな、と驚きました。3、4時間目の選択授業は、アートを選びました。一緒に選んだヘルミや周りの生徒は絵の具で絵を描いてました。私は鉛筆を使って絵を描きました。ヘルミが褒めてくれて嬉しかったです。この日のランチは、よくわからないどろっとしたものが出てきました。家に帰ってエミリーに聞くとお米をすりつぶしたものと言っていました。ちょっと私の口には合いませんでした。休み時間にサラとミラが学校の購買でラムネを買ってきてくれました。ゴム紐に通されてて首や腕にかけて食べると教えてくれました。ユニークな食べ物でした。私は、中学校に購買があることに驚きました。そして、今日で学校は最後だったので友達と沢山ハグしてきました。フィンランドは日本の学校と違うところが沢山ありました。スマホ、メイクOKでスマホは授業が始まる前に預けるけど片耳イヤホンしながら授業受けてる人も結構いました。席も自由だし、私語が結構多くて先生も大変そうでした。自由が沢山の刺激を受けました。みんなと出会えて本当に良かったと思います。

08 日目

いよいよ帰国の日となってしまいました。ハンネの目には涙が見えました。嬉しかったです。ホストファミリーにしっかりお礼を言ってわかれしました。そして、日本大使館を訪れてフィンランドのことを深く学び、お昼はデパートのお寿司屋さんに行きました。まさかフィンランドにお寿司屋さんがあると思わなくてびっくりしました。その後ヘルシンキ空港につきました。これからまた13時間も飛行機に乗ると考えるとため息が出ました。でも乗ってみると行きよりも早く感じました。そして、北海道に戻ってきました。自分の家族に再会できて嬉しかったけど名残惜しさもありました。



今回、フィンランドに視察団として行くことができ心から嬉しく思います。新しい出会いと外国への知識と自分の視野を広げることができました。私は、もっと勉強して絶対またフィンランドに行くという目標を立てました。ホストファミリーの方々、周りの友達、そして奈井江町、両親のおかげです。私の人生の大切な経験になりました。本当にありがとうございました。